

〈論説〉

三瀬諸淵の「失われた」ソクラテス論の迷宮・私論(一)

— 刑死と不知と「無知の知」文献史からの攷究 —

渡邊 雅弘

目次

1. 誤解の王国—虚実皮膜のはざま
2. ソクラテス論前篇手稿(1)—経国済民「学」(以上、本号)
3. ソクラテス論前篇手稿(2)—刑死(以下、次号)
4. ソクラテス論後篇手稿(1)—哲学語釈
5. ソクラテス論前篇手稿(2)—不知論
6. 行動する知性—和製ソフィストあるいはお雇い蘭医学者

1. 誤解の王国—虚実皮膜のはざま

三瀬諸淵(天保10年[1839]—明治10年[1877]):伊予大洲・萬年山大禪寺の墓表—

「先生幼名弁次郎周三と称す[通称・修夫—引用者]。天保十年十月一日生る。父、名は[塩商で大洲藩御用商・麓屋^{ふもと}]半兵衛、母は倉子^{クラ}、二宮敬作の姉なり。性温和にして穎悟、夙に神童の称あり。始め国学を常盤井^{いかしほこ}[嚴弋]衛叢に、蘭学を叔父敬作に学びし後、蘭人夫[シーボルト]氏に従て医術を究む。[時に長崎にて蘭学を学び、通称、周三。]偶奇遇[維新の騒乱]に遭ふや苦役[入牢]の傍、英蘭書を訳著し特に獄裡の衛生、囚徒の保健に関して献白し改善上尽瘁せり。後東京医学校大阪病院創設の事に従ひ専心學術の研究と後進の指導を任とし当時医学の泰斗と景仰せらる。

加之忠君愛国の志篤く常に文化の進展に努め君国に報ひる所あらんとせしが

天齡を仮さず忽焉として早世す。〔死因は劇症胃腸カタル、十月十九日歿、享年39。〕爾來年を閲すること五十、大正十五年九月十七日正五位を追贈せらる。地方有志協議会を設け医師会等の賛助を受け五十年祭並びに奉告祭を営み今大阪〔阿倍野〕の墳墓を此地に移し、更に碑を建て永く祀を絶たざらむ事を期す時に昭和三年十月なり。〕⁽¹⁾

無常のままに忘れられた生死が無数にある。忘れられないそれも、思い出されたそれも枚挙に暇がない。「歴史離れ」の虚構に厭きて、心を虚しくして「歴史其の儘」に推参した晩年の鷗外は和魂洋才の典型として、所謂史伝物に沈潜し、「澁江拙齋」、「伊澤蘭軒」、「北條霞亭」を歴史の埋没から掘り起こし救い出した。安永梧郎は評伝『馬場辰猪』（明治30年刊）を著し、嘉永3年（1850）生、明治21年（1888）、奇しくも三瀬諸淵と同じ享年39で客死夭逝の、この自由民権運動の「天下の士、一代の人豪」について、「俯仰長恨爾後十霜、而して人の能く其名を知らざる」と慨嘆した。辰猪歿後10年に満たない「正士を追ふ」痛憤である。本稿課題の三瀬諸淵についても、大正7年来、十年筐底に蔵されたその伝記『蘭學大家 三瀬諸淵先生』を著した長井石峰は嘆息を漏らした。「我邦文化の恩人であるにも拘らず數年前までは、全く世人に忘れられ、郷土に於ても其氏名すら記憶するものもなく、遺族の一人彦之進氏が、偶々之を語ることあるも、只冷笑を以て酬ひらるゝ位の状況であった」。⁽²⁾

あるいは、昭和20年、無謀な巨艦戦略の下、命運を賭す戦艦武蔵・大和の建造で本土決戦を画策し、捲土重来を期した危急存亡の秋のわが国に、各文系大学では哲學概論、希臘・羅馬史、考古学、ギリシア文学、ギリシア（古代）哲學、西洋倫理思想史、西洋美術・音楽史、カント・ヘーゲルの演習等々の「鬼畜」ものの授業と、読書会や研究会が平生と変わらず行われていたことを、知る人はあるだろうか。生死のかかった戦禍と物資不足、生活不如意の中で、無用で地味な研究が、陸続と論文書評刊本として上梓された驚くべき事実を、どれほどの人が知るだろうか。近藤書店翻刻『羅英辭典』（ルイス著、1915年）、エマソン／柳田泉譯『プレト即ち哲人』（近代偉人論第4巻中）、出隆「ソクラ

テスの毒杯とイエスの十字架」(基督教文化1巻10號)、J.B.Bury / 村田泰志譯『ギリシア史』、大橋孝吉『古代希臘美術(上中下)』、田中美知太郎「喜劇」(新潮1月號)、デュモリン『告白録における聖アウグスチヌスの回心への道』、原隨園「ギリシアに於ける歴史學の展開」(史林30巻3號)、呉茂一『ぎりしあの小説』、村田講師「希臘初期自然學とボリスの秩序」(西洋史讀書会、史林30巻1號)、井上智勇「ローマの政治と經濟」(西洋史讀書会、史林30巻4號)などは、その一端にすぎない。

さて、幕末にあって西洋文明に開眼した阿蘭陀通詞にして天才語学者・馬場佐十郎、「鎖国論」の志筑忠雄、「冬の鷹」前野蘭化、希臘語・羅旬語をも嗜んだ「^{せみ}舎密学」植物学の泰斗・宇田川榕菴、「胡蝶の夢」の司馬凌海、あるいは反射炉の江川太郎左衛門英龍、ビール醸造の川本幸民、小ダ・ヴィンチとも言ふべき、数知れない歴史の奔流に呑み込まれた錚々たる鬼才・異才・大才・天才をどれほどの人が知るだろうか。渡辺崋山、高野長英の結成した蘭学者結社・尚齒会、あるいは芝蘭堂、明治期後半に來日し尊崇を一身に集めた、お雇い外国人哲学者ラファエル・フォン・ケーベル、西洋哲学の修養を以て近代仏教の革新、すなわち「自力の呪縛から他力思想へ」を悲願とした清沢滿之、同じく「仏教ジャーナリスト」井上円了、最も信頼された西洋哲学史家にして「戦う哲学者」、「忘れられた思想家」大西祝、ニーチェ論争に火をつけた高山樗牛、綱島梁川、「講壇哲学」の大御所・井上哲次郎、通称「イノテツ」、桑木厳翼、昭和40年代半ばでも大学の一般教養科目「哲学」の教科書に指定されえた『西洋哲学史要』(明治34年刊)の著者・波多野精一、ローマ法研究の先駆けとしての馬場辰猪、小野梓、末松謙澄、宮崎道三郎等々、のみならず本邦初の「希臘哲学史」を上梓した同じ末松謙澄の一面や、本邦初の西洋経済学史書の著者・阪谷芳郎を知る人はなお少ないであろう。古今の典籍に通じた碩学・河野与一、現在では否定される、法隆寺廊柱のエンタシス説を提唱した日本建築史の伊東忠太はどうだろう。東京・雑司ヶ谷墓地に眠る漱石の大振りな墓所の見物人は絶えない一方で、久保^{まさる}勉のそれと並んで眠るケーベルの墓を訪う人はいない。東京・染井墓地に目立たない二葉亭四迷(長谷川辰之助)の墓があることは周

知であれ、親族以外に波多野精一の墓所を訪れ花を手向ける人はほぼ皆無であろう。先哲・三瀬諸淵もまたその例に洩れないように思われる。

「南蛮医術から始まって、カスバル流外科、本木良永による人体解剖図の翻訳と、出島に來航したオランダ人の教えを主体に、西洋医学が発展したばかりではなかった。それらが次第にオランダとヨーロッパの学問全体をリードしてゆき、ヨーロッパ医学が蘭学という一大文化を生み出した。そして名門の長崎オランダ通詞及び医家として桂川家・吉雄家・橋林家・本木家を誕生させ、江戸の蘭学社中として名高い医家の杉田家・大槻家・宇田川家が、日本全土に膨大な数の子弟を育ててきた壮大な歴史である。つまり、「出島の三学者」と呼ばれたケンペル、ツェンペリー、シーボルトたちを師として、蘭学の「医術」を学んだ者たちを柱にして、長崎通詞と蘭学者がその語学力を活かして、医術からコペルニクスの天文学へ、ニュートン力学へ、地理学へ、植物学へ、電気学へ、航海術へ、測量術へ、数学へ、砲術へと進み、最後には幕末の製鉄術へ、印刷術へ、写真術へ、蒸気機関へ、造船術へ、電信術へと、あらゆる文明の利器を開拓していった。さらには、この過程でヨーロッパの社会体制論にまで文化論・思想論を広げて、文明開化の道に入ってきたのがわが国であった。」⁽³⁾ 広瀬隆が言うように、長崎を淵藪として流入した蘭学の伝播継承と浸透、展開に、綺羅星のごとき星座、あるいは偉材の蜘蛛の巣のような結集がどれほど広く、深く、長年月をかけて江戸、大坂および、「蘭癖大名」を介して各地で貢献したことであったか。東洋戦略を強行した欧米列強とは対照的に「鉄砲を捨てた」ことで、商人資本主義の充実という矛盾をも含めて不変を是とする封建教学と鎖国体制の下、「徳川の平和」裡に鬱積した新知識への慾動が一挙に噴出した。江戸期に準備蓄積された経験主義の「反形而上学的思想」が解き放たれる「内からの近代化」の土壌があった。この素地を前提とし、それへの刺戟を通して、洋書邦訳の洪水が可能にした進取の「外からの近代化」が開花する。しかし、徳川幕府による「蕃書」輸入が深く先行し、その後「明治14年の政変」を契機として、維新政府が中央集権的な官僚機構の整備によって逆推進する支配体制の確立、「上からの近代化」の断行には、まだ暫時の暇があった。

年々歳々花相似、歳々年々人不同。及時當勉勵、歲月不待人。「明治は遠くなりにけり」ならば、殷鑑遠からずとしても、幕末はなお一層遠く、到底卑近とは言い難い。不可解に軋み矛盾する史料の瑣事にこだわり、驚きと、肺腑を衝く細部への共振を通して、まず聞き、そして問う、僅かな、あるいは溢れんばかりの史料の虚実皮膜のはざまを縫って往還することで、諸淵の「人」を再現するしかないであろう。激動波乱の転換期幕末であれ、「普請中」の明治であれ、子を失った母のごとき「哀惜の念」を以て、よく思い出さない限り、史実考証の契機も掴めない。神話・伝説を排除し厳密な史料批判を通して事象と人事の因果連関の検証可能性を唯一の規準とする実証主義史学の底流にも、「歴史とは過去と現在とのつきることを知らぬ対話」とする史観は脈打っているはずである。「人」の再現は賢しな合理的整序であればよいのではなく、合理的に整序されなくてもよいのではないか。例えば、「自己本位」の立場と、「則天去私」の乖離する心境につけた漱石の算段を、どう読み解けばよいのか、検証できない「人」の因果の子細は残るであろう。矛盾も謎もそのまま、「いゝ歴史は必ずいゝ文學である」と喝破した小林秀雄の聲みに倣って、「歴史は決して二度と繰り返しはしない。だからこそ僕等は過去を惜しむのである。歴史とは、人類の巨大な恨みに似てゐる。歴史を貫く筋金は、僕等の哀惜の念といふものであって、決して因果の鎖といふ様なものではない」⁽⁴⁾と、言えないだろうか。史家が「落暉よ、碑銘をかざれ」と叙し、歴史文学が「落日の宴」を物語るのは、裏声でもなければ感傷、贅言でもない。検証可能な「歴史」と、不可能な「神話」は厳密には区別できないであろう。

「読むことの歴史」におけるテキスト論、まさに「テキスト引用論」、「間テキスト性」、「作者不在」の「誤解の王国」（樋口覚）論は既に常識と化している。史料は歴史的制約を受けて現れる史家・読者と遭遇して初めて、「読まれる」作用影響的理解、あるいは意図せぬ誤解の行為を通して意味が生成し、したがって変遷する。書かれた以上作者から独立する史料自体に、超然とした意味が内在し確定されているわけではない。「テキストはあらゆる素材から独立しそれ自体で存在する、というような、文字そのものによって作り出され、大量の書

物の歴史書によってくり返されてきた見方とは反対に、テキストを読書に供する基盤なしには、それが読まれ（あるいは聴かれる）状況をぬきにしては、テキストは存在しない……。それは骨肉をもった読者によって、時代、場所、環境によって、異なる読み方で扱われる」。^⑤ 後代の史家が文書やテキストに時代の類縁を投影し、テキスト以上に字書を読み自己を読み時代を読み込むのは不可避にせよ、テキスト外の補助資料を傍証として援用しつつ、コンテキストを読み、テキストの一語に焦点を合わせることで、追体験的に作者と同じ位置に立ち、作者と同じものを見る必要があろう。作者に見えなかったものをも見る解読も「誤解」、すなわち「史家と史料との間の相互影響作用」の一法として許されるであろう。かくて「歴史其の儘」の一策としての歴史は、読者の自己、及び時代を写す「鏡」となりうる。

「正史」は潤沢な文書の史料・文献批判と考証の年代記、正面図であり、「稗史」は文書の不足を補う聞き書き、回想、伝承に重点を置かざるを得ない外史、側面図と言えよう。しかし、歴史に沈んだ先哲・三瀬諸淵の「人」を再現するには、いわば第三の道、すなわち伝存するその僅かな刊本、手記手稿、書翰、断簡零墨はもとより、虚実が一体化した伝説と「例によって」の頌徳、伝承を信頼して取捨選択する無謀な方法しか残されていないように思われる。したがって、就中、散佚したそのソクラテス論二手稿前後篇の内容の推定は、「正史」をも「稗史」をも及び得ない高峰とする、間接的な傍証を積み上げただけの検証不可能な恣意的構成、無意味な虚構、また一片の復古、あるいは、「歴史離れ」の「小説」に堕ちる危険なしとしない。迷宮に分け入るに、文献的引照を主に、思想的文脈、歴史的経緯を以て傍証とせざるをえない本稿が、隔靴搔痒の観を否めない点描の「私論」と題する所以である。

ところで、近代日本は反転する攘夷の放棄とともに、状況化していた儒学に代わる教学、哲学、医学・医療、天文学、暦学、歴史学、地理学、博物学、兵学、物理・化学、数学の他、従来未知の法律・政治・経済の制度化という、実学、その後非実学の多方面にわたって文明開化の「西洋を以て西洋に対抗し日本を守る」近代化「免疫システム」、独立強兵の「普請」を急務とした。列強

に対するに、その全構築は不可避の運命とも言えた。

しかし、後述するように、わけても幕末から明治初期、西洋学物の所謂「翻訳啓蒙」の混乱期に、その時代状況や思想状況とは全く接点をもたず、まさに時代も地理的条件も迂遠の極北にあるはずの「希臘史」、「希臘哲學（史）」に敢えて目を向けて、食欲に沈潜する、単なる「進取」を超えた精神は何に由来するのだろうか。慶長年間の南蛮学統から紅毛学（蘭学）・洋学という「輸入学問」受容の趨勢と推移のどこに、そして誰に、奇妙にも西洋思想・哲学の淵源をなす古典古代哲学それ自体への内発的傾注が生まれたのか。「一書の人を畏れよ」と言われる、クラシックス、第一級の一冊の古典をもつという「型」、つまり「最も役に立たないものを最も一生懸命に学ぶ」非現実的で非実利的な非実学、いわば無用な「最高の教養」（ネラン神父）への意欲と自覚の契機はどこにあったのか。明治期に「教養」の語が殆ど使用されなかったように、時代も地域も、前史も異なるルネサンスがなぜ「古典古代史をヨーロッパ史の第1章」として選び取り、わけてもギリシアの、それ以上にローマ古典の復興に集注したか。この「修養」の問いに匹敵する、「講壇哲学」や「教養俗物」の出現以前の難問は、わが国にも当然波及した「古典を失った大学」では、これまで十分検証されず、解明されてこなかったように思われる。^⑥ その西洋文化及び西洋哲学の象徴と観念されたソクラテス問題、とりわけその要石、柱石をなす「不知」論の不在と、それに立ち向かう受容は、初源の「哲学史成立の現場」での意欲と自覚のありよう、主体的選択の浸透と表裏一体をなしたはずである。イエス・キリスト同様、著作を残さなかったソクラテスの思想とプラトン哲学に線引きするバーネット・テイラー説に拠ろうと拠るまいと、誰がいつ古典中の古典、人物中の人物たるソクラテスのデーモンに憑かれたのか。一次原典に拠ろうと二次解説を鵜呑みにしようと、誰が、鬱陶しい無用な「蛇」のようなソクラテスを自己の「鏡」、「鑑」として選び取ったのか。誰が、ソクラテスの思想と「人」によって自分のそれを問い始め、自分を掘り下げ問いを深めたのであろうか。この「無用の用」への自彊を問う史的文脈に諸淵のソクラテス論二手稿を位置づける必要があるだろう。成熟して「全幅の精神を傾注し

た」(鷗外) 古典学徒の攷究は、西洋哲学の外発し触発する学史的関心や伝統、慣習、あるいは単なる好奇心、また気紛れな思いつきに帰すべき問題ではない。偶然性を排除し抽象的法則性の下に演繹する思弁的「理論と設計」と、旧慣墨守の踏襲を越えて、「経験と実感」に基づく具体的帰納的な「誤解」との選択如何の問題と言えよう。

本邦における西洋哲学および哲学史、さらにギリシア哲学・哲学史受容の嚆矢を西周、津田真道に帰する定説は、結論の如何を問わず、再検討を要しないだろうか。諸淵ソクラテス論の再現は、こうした問いを投げかける。

推定の限りでの諸淵は、独自の、それゆえ先駆的位置を占めるであろう。それは、いわば游歴する「和製ソフィスト」のソクラテス論の観なしとしない。しかし、後述するように、そのソクラテス論二手稿、就中その後篇「哲學」手稿は、主題への主体的沈潜の点で、おそらく近代日本の西洋古典学研究、ギリシア学・ローマ学史上の先駆的偉業と称して過言でないであろう。西洋哲学史研究の嚆矢でも白眉でもないにせよ、過小評価され気味の高野長英「西洋学師ノ説」、その断片一枚すら綿密に攷究される西周の、例えば「生性發蘊」の後塵を拝するに甘んじない述作のように思われる。

しかし、反俗でも脱俗でもなく、市井にあって「井蛙脱皮」(住谷悦治)の非俗の「高士」たらんとしたこの先哲は、幕末から明治初期の「第一の開国」という未曾有の転換期に生を享けて短折したがゆえに、忘れられたであろう。既に明治時代に一度その広範な先駆的学問の紹介も後継も断たれ、今は郷土史の偉人、あるいは「大洲教学」の一駒として、その伝説が語り継がれるばかりである。のみならず、その学究としての多方面にわたる著訳書も、数で刊本に優る手記手稿のほとんどが所在不明となったがゆえに、忘れられたであろう。昭和12年、住谷悦治が諸淵の医学・薬学の訳述刊本『日講記聞藥物學』及び『日講記聞原病各論』を古書店で発見したのは、奇跡に近く、二稿本にわたるソクラテス論もまた、筐底に埋もれた手稿のまま、既に戦前に散佚している。⁽⁷⁾「①歴史の部 (Geschichite) ギリシャ (ソクラテス・アリストテレス・プラトン)」を含む手稿「獨文 政治學・經濟學」は戦前、在満州の「豊田博士」に貸し出

されたまま散佚し、他方表題のみ知られる「哲學（自書）」には、手稿の片鱗も残されていない。「一老莊の哲學・ソクラテスの哲學・カントの哲學」なる一行に満たない住谷補註が伝承されるばかりである。今後も狩野亨吉による安藤昌益の自筆稿本「自然真営道」の発見のごとき僥倖は、諸淵に望むべくもないのではないか。

本稿は、かくして「忘れられた三瀬諸淵」⁽⁸⁾の、その忘れられたソクラテス論の概要を推定する、二重の落ち穂拾いの試みである。

現在知られる諸淵の著訳書は、手記手稿、刊本を含めて、以下の通りである。所蔵が知られる手記刊本9種には◎印を、ソクラテス論二手稿には※印を附した。⁽⁹⁾

手稿「獨文 政治學・經濟學」、すなわちソクラテス論前篇は、諸淵が宇和島藩主・伊達宗城公に招聘され藩校「英蘭學稽古場」で語学教授した慶應2年[1866]から、明治3年[1870]、刑部省囚獄司医局勤務（在東京）となるまでの間に、執筆されたと思われる。したがって、手稿「哲學」、すなわちソクラテス論後篇は、長崎游学時に改名した通称「周三」の稿本ではなく、国学の修養を以て名乗った実名で諱「諸淵」の述作と思われる。文久2年[1862]の書翰には、その諸淵の署名が見えている。後述するように、「淵」は国学和歌の素養と、ソクラテスの「不知」に通じるのであろう。あるいは、やはり短折が惜まれた、孔門十哲の第一・顔淵（回）に因んだか。そもそも前篇と後篇では、混沌たる時代状況に強いられた所産とはいえ、諸淵の、その思想及び「人」としてのソクラテスに向かう関心のありようが異なっている。それゆえ後篇は、ソクラテス論前篇を含む、宇和島にあって慶應2年（1866）擱筆された手稿「獨文 政治學・經濟學」以降、「諸淵」の改名を経た、明治10年（1877）夭逝時までの間の執筆・脱稿と推定される。幕府から維新政府へ、長崎、江戸、宇和島、大洲、大阪、東京と游歴する、古くはソフィストのようで、ソフィストにまがう謝金や名誉では割り切れない「お雇い蘭医学者」諸淵はその時、東京と大阪のいずれかにいた。

- (一) 「日本語格の蘭譯」(安政6年[1859]、21歳。長崎游学時代に、再航したシーボルト長子アレキサンデルに日本語教授するに際して作成された日本文典。「日本文典蘭譯原稿」2枚のみ現存。)
- (二) 「英文典」(安政6年[1859]、21歳。長崎で翻譯自書したもの。駿河半紙横書300枚に及ぶ。)
- (三) 「日蘭英佛對譯日本大辭典」(萬延元年[1860]、22歳。長崎出島でシーボルトと共作。)
- (四) 「物理學、人身解剖學、人身生理學、窮理學、舍密學―「組織學」」(長崎にて自書。萬延元年[1860]、22歳。各科毎に異なる色のインクで記述し、綴じた書物裏に「生殖學・組織學」と記された約100枚。「人身生理学」1冊が現存という。)
- (五) 「蘭文典日本譯」(文久元年[1861]、23歳。江戸・赤羽根接遇所での譯業。)
- (六) 「日本歴史蘭譯」(蘭文。文久元年[1861]、23歳。シーボルトの依頼による。)
- (七) 「日本國民文化的發達史」(蘭文。文久元年[1861]、23歳。シーボルトの依頼による。)
- (八) 「〔徳川〕幕府建設史―幕府の發生と其の理由」(蘭文。文久元年[1861]、23歳。シーボルトの依頼による。[*住谷註―この目次によってみるに三瀬諸淵とシーボルトとは日本の歴史と当時の重要な問題についての知識は十分に蓄え研究していたことが知られよう。])

内容：(1) 王政復古の努力 (2) 封建制度および近代的國家への轉換期に於ける日本の憲法王權篡奪の争ひと皇帝の地位 (3) 幕府と皇室 (4) 徳川幕府 (5) 采邑制度 (6) 貴族の墮落と貧窮 (7) 皇室の權利 (8) 皇帝と幕府間の關係 (9) 孝明天皇 (10) 徳川家に於ける繼嗣問題 (11) 水戸老侯 (12) 尊皇攘夷 (13) 水戸浪士 (14) 幕府の弱點 (15) 皇帝の大權承認 (16) 大老井伊掃部頭 (17) 英

米佛露蘭との通商條約の締結（18）條約が内政に及ぼした影響と幕府の恐怖政治〔蛭社の獄—引用者〕（19）大老井伊掃部頭櫻田門に殺さる。

（九）「和蘭外科書翻譯」（蘭書邦譯。文久2年〔1862〕、24歳。江戸下谷御徒町大洲藩邸に幽囚中の譯業。）

（十）「和蘭眼科翻譯」（蘭書邦譯。文久2年〔1862〕、24歳。江戸下谷御徒町大洲藩邸に幽囚中、岡島恭庵の依嘱による。）

（十一）「英文典翻譯」（元治元年〔1864〕、26歳。杉田宗端の依頼による。「英文典」1冊が現存。）

（十二）「蘭語翻譯の鍵」（佃島獄中の譯業か？）

（十三）「獨英蘭佛對譯集」（佃島獄中の譯業か？）

（十四）「英漢對譯知環啓蒙」（元治元年〔1864〕、26歳か？）

（十五）「和蘭辭書」（元治元年〔1864〕、26歳か？）

（十六）「日獨蘭英對譯集」（佃島獄中の譯業。）

（十七）◎「愈里伊羅安〔ユリーラー〕検査書」（尿検査書。文久2年〔1862〕、24歳以後、明治元—2年〔1869〕頃譯了か？原書不明。富士川本。）

（十八）◎「遊女論」（ハーグ市法令の諸淵譯。年代不明、明治2年頃の譯稿か？シーボルト記念館所蔵。）〔*筆者註—娼妓運動の起点は、明治5年〔1872〕の「マリア・ルーズ」号事件。人身売買及び奴隷契約としての公娼制度の存廃については、19世紀後半から20世紀初頭にかけて、欧米では（1）否認、（2）放任、（3）黙認、（4）公認の4類型があった。諸淵譯ハーグ市法令は類型（4）に当たる。太政官布告もあり、公娼制度の廃止は国際輿論の趨勢になっていた。公衆衛生と病理学の観点から法規制をかける目論見があった。稻垣銀治譯『賣淫沿革史〔希臘國ノ國情〕』3冊、奢章閣。

明治10年。佛人學士エムデュチャテレット／刀根宗二郎譯
『娼婦論（上中下）』、煙霞書樓、明治10年。]

(十九) ◎「諸淵備忘録」（和綴37枚）及び「略年譜」[先生自書。慶應元年[1865]
初夏、小冊子]

(二十) ※「獨文 政治學・經濟學」（自書。明治2年（1869）頃擱筆？。手稿
後書の日付は、慶應2年（1866）2月16日、
28歳。ソクラテス論前篇。散佚。）[＊住
谷註は本稿第2章劈頭に引用。]

内容：①歴史の部（Geschichte）ギリシャ（ソクラテス・アリストテレス・
プラトン）②序論（Einleitung）政治的又は社會的經濟學の分類
③人民經濟學—國民經濟學（Volkswirtschaft, Volkswirtschaftlichen
oder Nationalökonomie）④人民社會的政治學（Volkschaftliches
Politik）⑤財政學（Finanzwissenschaft）

(二一) ※「哲學」（自書）—老莊の哲學・ソクラテスの哲學・カントの哲學」[年
代不明。明治3－10年の間か？ ソクラテス論後篇。
住谷は当時、三瀬家所蔵と記しているが、現在、散
佚。]

(二二) 「專賣特許法制定意見書」（手記。年代不明。）[＊筆者註—当時の専売
品の紹介及び専売特許法についての詳細は、石井研
堂『増補改訂 明治事物起源（上）』、春陽堂、160頁、
998-1000頁、参照。難産の実際の発明専売特許規則
は、明治4年、一度公布され、同18年発布施行となっ
た。不平等条約の解消と特許専売法制は、日本産業
の発展に不可欠の一対と理解されていた。諸淵意見
書はそれ以前の執筆と推定される。福沢諭吉、神田
孝平、前田正名、岩倉具視、井上馨などの貢献もあ
る。]

(二三) ◎「社會黨撲滅ニ對スル獨乙法」[＊住谷註—三瀬家所蔵の太政官用箋

に記されてある手記全文。「社會黨撲滅規則
千八百七十八年十月二十一日頒布 最初
千八百八十一年迄實施シ又タ千八百八十一年
ニ法令ヲ發シテ其期限千八百八十四年迄延
期シタルナリ」(手記原文のまま。) 明治4
年(1871)、東京醫大在勤中。—先生の手記
であることは如何にしても承認しえない。
[*筆者註-諸淵の手記でない文書が混入し
た可能性が高い。本稿註(9)、参照。]

(二四)「獨乙陸軍々制」(獨文手記。明治4年(1871)、東京醫大在勤中。)

(二五)「蘭語手記」(Bastaal (A-W) 菊判162頁。)

(二六)「日本語字彙」(蘭文。年代不明。)

(二七)「日本語學畧說」(蘭文。年代不明。)

(二八) ◎『日講記聞藥物學』(全20卷。越尔蔑璉斯[エルメレンス] 講述・諸
淵譯・高橋正純増補、書籍會社、明治6年(1873)
刊? 蘭醫エルメレンスの明治6年より大阪附病
院での毎日の講述を翻訳し増補したもの。昭和
12年、住谷悦治発見。)

内容：(1) 總論上 (2) 總論下 (3) 収斂藥 (4) 保固藥 (5) 保固藥植物
性 (6) 金屬保固藥 (7) 衝動藥、血管衝動藥、神經衝動藥腦衝動
藥 (8) 腦衝動藥 (9) 脊髓衝動藥 (10) 神經鎮靜藥 (11) 腦鎮靜
藥 (12) 變質藥 (附・水銀製劑ヲ梅毒二用ル法) (13) 變質藥 (14)
變質藥、吐藥 (15) 下藥、緩下藥、強下藥、峻下藥 (附・灌腸法)
(16) 利尿劑、發汗藥、祛痰藥 (17) 祛痰藥、膽汁ノ分泌ヲ進ム
ル藥、通經藥、子宮ノ斂縮ヲ進ル藥、即催生藥、唾液ノ分泌ヲ進
ル藥、即咀嚼藥、鼻涕ノ分泌ヲ進ル藥、即發嚏藥、皮膚刺衝藥、
即誘導藥、發泡藥。

(二九) ◎『日講記聞原病學各論』(全13(18?) 卷。越尔(爾) 蔑璉斯[エ

ルメレンス] 講述内第4巻まで諸淵譯、岡澤貞一郎校、書籍會社、明治6-9年(1873-76)刊?昭和12年、住谷悦治發見。津山洋学資料館所蔵寄託資料。諸淵の歿後、『原病學各論』高橋正純・三瀬諸淵譯、大阪公立病院、明治12年、として刊行。)

内容：(1) 呼吸器病篇 (2) 肺臟諸病 (3) 肝臟諸病 (4) 循環器病。

(三十) ◎『日講記聞外科各論』(全10巻。越爾蔑璉斯[エルメレンス] 講述、原田俊三・高橋正純・三瀬諸淵譯、大阪病院、官板、明治12年(1879)。諸淵歿後の刊行。)

(三一) ◎「麦酒醸造説」(諸淵譯。年代不明。シーボルト記念館所蔵。)

(三二) ◎「国医論」(中西啓氏仮題、諸淵譯。年代不明。シーボルト記念館所蔵。)

住谷悦治は、「師として實に申し分なき國寶的な大先生であつた」シーボルトを「世界的な萬有學者」と評し、藤森成吉もまた、大著『日本』に結実し、久しくヨーロッパにおける「日本学」の泰斗となるシーボルトの学問的関心を「万有学的」⁽¹⁰⁾と形容した。この医学・博物学を中心とする万学的志向、つまり百科全書の関心は、シーボルト再航後の最後の愛弟子・諸淵の学知にも受け継がれたと言えよう。のちに木下杢太郎(太田正雄)が「テーベス百門の大都」と陸軍軍医總監にして文豪・鷗外のその和魂洋才の学殖を絶賛したように、諸淵に予想された近代的学知の展開は、旧知の西周ならば、自らが抱負とした「百學連環(*Encyclopediae*)」と呼んだに相違ない。

馬場辰猪について言われた、「天齡を」、また天健康を仮せばと、数奇な人生を死に急いだわけでもない諸淵の病歿が惜しまれる。安政2年[1855]、敢えて塩商の家督を継がず、馬場辰猪と同じく、「十年素養の學殖を以てして、祖國の荒原を開拓せんと」覚悟した諸淵は、明治7年[1874]に「立國は私なり公に非ざるなり」とする福沢諭吉の提起した「學者職分論」と「非學者職分論」

の民間官途の形式的な人材区分論争と、無縁であった。諸淵は旧幕臣勝海舟、榎本武揚宛ての、筐底に秘せられた福沢の絶筆「瘦我慢ノ説」を知らなかったであろう。しかし、対極の立場にある旧知福沢の「内的な論理を無視して外部の利害に屈服し一身の功利しか考えぬ新時代の気風、世相」、すなわち武士の町人化を唾棄して、「主義思想に生きる」者の「一身の利害の念を没却した無償の献身への熱情、誇り」を共有したであろう。したがって、国家の根源悪たる「武士化した町人」や「町人化した武士」の統治を嫌った福沢のように、諸淵は拱手傍観する閑日月や達観する晩成の許された書齋人でもなく、狷介な「篤学の隠士」でもなかった。西周や福沢の説いた自由主義・功利主義の世俗化の功罪、「一身の功利しか考えぬ人心風靡の世相」への反転下で、諸淵は「世界の大勢に目を配り」、「よほどの自信を持って将来に備えたものか・・・その庶民的感性と先駆的精神のしからしめたものか、星移り物変わり、その心情のほどは尋ねべくもない」。風采や「名利に恬淡として」、早熟な生と一体の「学究に終始した明治文化への隠れたる貢献者」、「独特な生き方をした洋学者（獨英蘭等の語學に通じた醫學者）」⁽¹¹⁾であった。「百年後の知己を待つ」（西村茂樹）高邁な心映えがあったか、諸淵は隠れて生きる、単なる「刀圭家」ではなかった。諸淵もまた、「一級の学識を持つ代々の商館医師から修学し・・・自国の弱点を補足し、日本をして新しい世紀へ橋渡しする縁の下を舞っていた」オランダ通詞や游歴する蘭医学者の一人であった。蘭学史家・杉本つとむは、夙に学海重鎮の一人となった諸淵の早世病歿の不条理をこう評した。⁽¹²⁾

「幕末から明治初期にかけて活躍した三瀬諸淵に、やはり旧と新、時代という大きなうねりにのみこまれた一人の日本人の姿をみる。一個人のある意味では数奇な運命は名もなく地位も、家柄もない一天才に、人並みの十分な安息と名誉をやはり与えていない。医学・医院建設という人民のための厚生救済という偉大なる国家的大業を実行せんとするかげで、必ずしも十分に報われることなく、若い命を散らせていくという、何か空虚感が諸淵の死にのこり、感慨入なものがある。最後の栄光をかちうるものはだれなのか、冷厳な事実人間生存の意味をしらされる」。

2. ソクラテス論前篇手稿 (1) — 経国済民「学」

諸淵のソクラテス論手稿前篇「獨文 政治學・經濟學」は散佚した。昭和12年当時、遺品・文献を整理した住谷悦治は、この前篇手稿を見分できなかった事情を次のように記している。この僅かな住谷補註が本篇手稿に関する唯一の二次資料である。⁽¹³⁾「三瀬家所蔵。明治二年頃、自書のまま。その内容一斑を示せば次の如し。①歴史の部 (Geschichte) ギリシャ (ソクラテス・アリストテレス・プラトン) ②序論 (Einleitung) 政治的又は社會的經濟學の分類③人民經濟學—國民經濟學 (Volkswirtschaft, Volkswirtschaftlichen oder Nationalökonomie) ④人民社會的政治學 (Volkshaftliches Politik) ⑤財政學 (Finanzwissenschaft) 本原稿は・・・わたしが文献整理当時、大連の豊田博士閲覧中とのことにて参見し得なかったが、博士の三瀬家へ書き残された本稿に関する引用文献は次の如くである。著者及発行年度は記入していない。Der Theoretische Nationaloekonomie (Abschnitt略) 本原稿後書の日付は一八六六年二月十六日とある由。即ち慶応二年諸淵二八歳の時であるが、日本における政治学・経済学の本格的組織的講義 (著書) は明治二年「官許同志社英学校」において、D・W・ラーネット博士によって始めて行なわれたとされていたが、諸淵の本原稿の項目によれば、本格的のものであり真に驚くに堪えざるものと言い得る。」

おそらく、この「豊田博士」の借用書メモに記された、著者及発行年の記入のない引用原本 *Der Theoretische Nationaloekonomie* の注記から推して、旧歴史学派の巨頭 Wilhelm Roscher, *Grundriss zur Vorlesungen über die Staatswirtschaft nach geschichtlicher Methode*, Göttingen, 1843 (天保14年) [岩波文庫版邦訳『歴史的方法に據る國家經濟學講義要綱』昭和13年刊。] と思われる。⁽¹⁴⁾ ドイツ旧歴史学派は、18世紀末、古典派經濟学を批判したF・リストの創始にかかり、それを継承したロツシャー、クニース、ヒルデブラントが、師ヘーゲルに倣って、「國家經濟學」を「政治學」の一部とし、国家有機体の發展法則性を把握する経験科学として、國民經濟生活の歴史的研究に着眼する学派を確立した。

そこには、国民経済は有機体的である限り、個別経済の単なる集合・集積でなく、「民族」のなかに、国家形態および法の漸次的発展と同様に経済それ自体の発展を人間の生の展開になぞらえて考え出された生活糧の一部として体験するような、個体」(傍点、原文)⁽¹⁵⁾とする信念がある。史実を検証する浩瀚な諸著の中でも、ロッシャー若書さの『歴史的方法に據る國家經濟學講義要綱』は同派体系の見取り図、根本原則を抜粋した宣言であると同時に、ロッシャー自身の研究展開の足場をも提示している。歴史法学興隆の時代でもあった。諸淵は東洋の片隅で、この18世紀初頭のドイツ経済学の「墮落」とも評される旧歴史学派最初の「記念碑的著作」を参看し得たことになる。

「進化法則は國民の「繁榮＝沒落」といふ表現に於いて、或は「低度＝中間＝高度」の文化段階といふ表現に於いて把握される。こゝに至つて彼の進化法則は多分に國民主義的有機觀によつて支持され、經濟現象は他の法律・言語等の諸現象と一緒に國民全體のうちに包括されるものであり、國民の生起消長と運命を同じくするものであると見られる。さうしてかゝる有機體の發展のうちに、或る制度が廢たれ他の制度が採られるといふ相對性が見出され、延いて國民興亡の教訓を汲みとらんとする政策論が出てくる。即ち複雑多様な國民の歴史的進行を觀察することによつて政策的判斷の手がかりを掴まうとする」。「獨逸經濟學が英國「古典派」經濟學に對抗して自分のものを見出さんとした道行は、そのあらゆる紆余曲折を含めて、今日「昭和13年」我が國の經濟學が眞に日本的なものを見出さんとしてゐる轉換期にとって他山の石となるであらう」。(同上)

しかし、この昭和の「第二の開國」に先行した幕末・明治の「第一の開國」期もまた、まさに産業資本主義化の過程で英仏に「遅れて来た國民」(ドイツ)が直面したのと同様の、後続發進國に特有の「轉換期」であつた。

17世紀、「陽の沈むことのない」「南蛮」國は「靈魂と胡椒」を旗印に鉄砲を持ち込み、キリスト教布教を尖兵として、一国自体の奴隸化、人身売買、植民地化政策を強行する東洋經略の野望を隠さなかつた。一方18世紀、「紅毛」列強は同じ植民地化政略の野望と重商主義政策の下、新型蒸氣船に大砲を掲げて、

「鉄砲を捨てた国」に外発的に「開港」(開国)を迫った。しかし、幕府はその兵事的脅威の下にあっても、幕藩体制の支柱、竜骨たる祖法「鎖国」の硬直化した常態を終に解除しなかった。列強は、「日本の強硬な一列強からすれば、はがゆいほど煮え切らず鈍重な一抵抗の前に、インドや中国に対したような植民地化への野望を断念せざるをえず、自国の貿易の利を挙げるという対日政策に変わって行った」。⁽¹⁶⁾ 不透明に変転する世界情勢の下、衰微著しい幕府は不平等条約、国富毀損の大量流失を許した金・銀・銅の交換比率での不利な通商政策、通貨問題と同時に、対内的な土地経済から貨幣経済の浸透による町人勢力の勃興に挟撃された。幕府喫緊の課題は、「治國學上」不十分な富国強兵上の新知識、洋学修養の全面的解禁であった。文久2年[1862]、幕命によって津田真道とともにオランダに留学した西周は教授ホフマン宛書簡に、故国の実情を認めている。「ヨーロッパ諸國との關係において、また内政及び施設の改良を行うためにも、より必要な學問及び統計學法律學及び經濟學政治外交等の學問は全然知られていない。」⁽¹⁷⁾ 維新政府成立にともなって宣明された「經綸」(福岡孝弟)が「經濟學」あるいは「財政學」、「理財學」を意味する限り、「經國濟民」の学理は集権的統治という「上からの近代化」と、革新的な知的自覚に不可欠な台木となる新知識であった。

西周は当時最新のコント実証主義・自由主義・功利主義思想と古典派経済学説を吸収して帰朝し、津田真道は「本物の」唯物論者に変貌した。それに対して、諸淵は留学せずに、むしろ保護貿易主義の主張とスミス古典派経済学・自由貿易主義批判の急先鋒たるドイツ旧歴史学派の経済学理に沈潜していた。「世を濟ひ、國を經るは人間時に處するの最大要務なるが故に、夫の經濟學は社會萬般の學科中に於て、もつとも習熟せざるをえざるなり。」⁽¹⁸⁾ 幕府も維新藩閥政府もともに「萬國公法」上、「齊家治國」の政策学としての経済学を要したばかりか、巷間の論争白熱化をよそに先行して「国家主義的」保護貿易政策を不可避とする、強いられた現実があった。経済学説という「輸血の學問」(木村毅)、あるいは日本の「鑑」の現実有効性をめぐる、自由貿易擁護論に後発の保護貿易擁護論が挑む、澎湃として沸騰する評壇・学界論争の応酬が展開

されていった。自由貿易擁護論は自由民権運動の昂揚、展開と連動して、西周、神田孝平、福沢諭吉及び「自由主義経済学の牙城」慶應義塾社中、田口卯吉など民間で既に唱導されていた。他方、欧州論争モデルの帰趨そのままに、現実から乖離する自由貿易主義から転じた大学南校中助教・若山儀一が、保護貿易擁護論を主唱した。医学・蘭学研究を志した長崎への游学後、東京でお雇い米国人教師フルベッキに従って経済学研究に進んだ若山は、若書きの小著『保護税説・同附録』（明治4年〔1871〕刊。同年、西川姓より若山姓を称す。）を上梓したのである。論争以前の諸淵も、論争に火をつけた若山も、短命のいわば「日本旧歴史学派」を意図せずに形成しつつ、幕府や維新政府の断行する保護貿易政策の理論的支柱の役割を担ったと思われる。

「幕末から明治初期にかけて移入された西洋経済學は、・・・イギリス正統派の自由主義経済學として・・・いち早く翻譯紹介せられ、いわゆる經濟學翻譯時代を出現したが、・・・イギリスの功利主義個人主義思想、フランスの民権思想と天賦人權論、アメリカのキリスト教思想、ドイツのビスマルク流の國權思想等々、華々しい翻譯移入時代を現出。・・・後進日本の翻譯文化の段階を示すものでろう。この翻譯移入經濟學は、主としてイギリス正統派經濟學として知られた自由主義經濟學であり、イデオロギーとしてはそれと結ぶ功利派のそれであり、・・・そしてそれが、經濟學であるかぎり手當り次第翻譯されたらしく啓蒙的意義や生活實利的意義も多分に含まれていたと思われるのである。・・・イギリス正統派經濟學が移入され、自由放任主義や、自由貿易が主流的に唱導されるとともに時を同じうして實際問題として保護貿易説とか國家主義經濟思想が眞剣に採りあげられ、翻譯され論議された・・・。自由貿易思想そのものの紹介さえも、實は、保護貿易論・保護關稅政^{ママ}・策育成干渉政策に反對するために行われたのであつた。」⁽¹⁹⁾

ところで、学界の耳目を聳動せしめた明治10年代に、「藩籍奉還、廢藩置県、廢刀令、斷髮令などをはじめとする封建諸制度の撤廢—その疾風のような迅速さは、福沢諭吉をさえ驚倒せしめた—と徴兵令、地租改正、義務教育令などの近代國家への衣更えのための急速な進展は、わずか10年足らずの間に行われた

ために、国民の態勢が整わず、明治10年代になって深刻な摩擦をひきおこした。明治10年の西南の役と15年を中心に次第にはげしくなっていた自由民権運動であった。この2つの事件は、資本の本源的蓄積の対極としての賃労働の創出を予想させ—より具体的には、封建家臣団の解体とプロレタリア化と農民層分解—、やがて来るべき明治20年代後半からの労働運動および社会主義運動への前提条件をなしていた。」⁽²⁰⁾

続く明治20年代と30年代にわたる10数年は、商業資本主義の域を超える重大な転機となり、わが国の勃興する産業資本主義の確立期にあたっていた。いまだ翻訳紹介に踟躇していた、保護貿易主義に立つ旧歴史学派経済学説の急速な移入も、国家国民主義的理念の浸透と同時に、現実と乖離する自由貿易主義理論を以ては、産業資本主義化の進行に伴って深刻化する諸問題、わけてもわが国が初めて直面する新興の労働問題が解決不能に陥ったからである。「明治20年代とは、・・・国内における自由民権運動の挫折と、対外的には、条約改正問題がはげしく論議された時代である。国民主義的傾向が濃厚となり、経済政策としては、国内的には前田正名によって代表される実業振興運動、そして対外的には、関税自主権の回復運動をはじめとして、国民主義的な雰囲気盛り上がった時代である。明治22年、大島貞益によって、フリードリッヒ・リストの『政治経済學の國民的體系』が、『李氏經濟論』として邦訳されたことも、このような事情を背景としている。」⁽²¹⁾

ソクラテス前篇手稿執筆時の諸淵は、自由貿易・保護貿易擁護論争前の局外にいた。しかし、所謂「空想的社会主義」と社会問題の発生については、『國家經濟學講義要綱』（第4編60節「社會主義者」）を通して、一定の知識を得ていた。諸淵が、Sozialismusを当時の多様な訳語「公共學派」、「公共黨」、「社會黨」、「社會黨主義」、「社會黨説」、「社會黨論」、「社會論」、「社會主義」等のいずれで解したかは不明である。他書と推定の邦訳手稿「社會黨撲滅ニ對スル獨乙法」が真筆として諸淵文庫に紛れた所以である。確かに諸淵は初出の「コミュニスム」と「ソシアリスム」、「ソーシアリスト」の語を、加藤弘之『眞政大意』（上下2冊、山吹屋佐兵衛等、明治3年〔1867〕刊。）や〔明治4（1868）

彌爾〔ミル〕／中村敬太郎（正直）譯『自由之理』（卷之四、木平謙一郎、明治4（1868）刊。）を通して知り得た以上、プラトンの「共產制」どころか、ドイツにおける社会主義の先駆をマルクス、ラッサールに見出していた可能性は否定できない。しかし、西周がミルの『利學』を邦訳した明治10年〔1877〕に急逝した諸淵は、金井延がドイツ「社會政策學會」（1872年）に倣った「日本社会政策学会」（明治29年〔1896〕設立）の創設を以て貿易論争に終止符を打つ、学会動向とも無縁であった。金井は旧歴史学派の申し子M・ヴェーバーに目的合理的歴史性の思想を、新歴史学派G・シュモラーに対抗社会主義と社会政策立案の学理を直接学んでいた。その帰朝土産が、金井論文「ボアソナード氏ノ經濟論ヲ評ス」（法學協會雜誌10卷12號／11卷2號、明治25年〔1892〕／26年。）である。同学会は、「歴史的方法による經濟研究」のみならず、社会（主義）科学にも傾斜せず、社会改良主義と社会政策学に局限するわが国經濟学会の主流として、經濟学界をほぼ網羅した。「それは①維新以來の單なる復古的・國粹的反動的な國家主義を斥け、②自由放任主義を批判し、③次第に勃興しつつあつた勞働運動、社會主義の運動と理論とに反對したところの近代的な統一的國民主義經濟確立への道であり、まさに維新藩閥政府の國是と矛盾とに内包した近代國家への發展方向に照應するものであつた。」⁽²²⁾ 諸淵は、ドイツ觀念論哲学の輸入が準備した、大正期以降のマルクス主義の普及と「赤化」勞働運動の激化を起因とする、同学会の分裂解体を、目撃することもなかった。無論、そのマルクス主義の浸透と旧歴史学派の文献流布が素地をなす、明治末年以降におけるM・ヴェーバーの「発見」とも、無縁であった。

したがって、ロッシヤー学説の援用は、「經濟學翻譯時代」の諸淵を嚆矢とするように思われる。先蹤があつたか否か、諸淵がロッシヤーを知り得た経緯は不明である。『保護稅說・同附録』（明治4年〔1871〕刊）を著した若山儀一に、ロッシヤーの影響は判然としない。⁽²³⁾ 同年のその留学先は米国であり、保護貿易論を再度力説した、約翰・別兒邪兒士・巴伊兒〔ジョン・バルナルド・バイルス〕原著／若山譯『自由交易穴探』（明治10年〔1877〕刊）は、英書J.B.Byles, *Sophisms of Free-Trade and Popular Political Economy Examined*, 1849

(1850 3rd ed., with corrections and additions) の邦訳である。他方、「右手にバイブルを持ち、左手に経済學を携へ、この二つを以てわが國の教化」を使命とした米国宣教師 D・W・ラーネッドも、明治 2 年 [1869]、同志社英学校で古典派経済學・自由貿易論を講じた後、明治 10 年代には保護貿易主義に転じた。ラーネッドは明治 16 年の同大学経済學講義で、訳語「社會主義」を用いて嚆矢された人物でもある。(石井研堂『増補改訂 明治事物起源 (上)』、前掲書、227 頁。) 杉享二、牛場卓藏、「国民道徳論」の大立者・西村茂樹等が保護貿易主義を奉じて参戦した。しかし諸淵後進の、リスト、ロッシヤーの旧歴史學派の直接援用は、保護貿易主義の大島貞益譯『李 [リスト] 氏經濟論』(日本經濟會、明治 22 年 [1889]。) と、同『情勢論——名、保護貿易一斑』(煮海館、明治 24 [1891]。) の刊行まで、20 年を待たねばならない。その「空白」を僅かに埋めたのが、ロッシヤー亞流で、従来の古典派經濟學說と折衷した「伊國經濟學士」L・コッサ (Luigi Cossa) であった。旧歴史學派の代用であったコッサが、後述するように、邦訳を介して、わが國に本格的に輸入紹介され流布するのは、明治 20 年前後である。新興國ドイツに「文明開化」と「富國強兵」の範を採る國策轉換を決定した「明治 14 年の政變」後、コッサは學史的関心の下に、明治 17 年の伴痴齋の邦訳で注目され、和田垣謙三、平田東助、草鹿丁卯次郎等によって漸次紹介されてゆく。コッサを援用した中川恒次郎『經濟實學講義』(卷之一、二。岩本米次郎、明治 19-20 年。) と、コッサを忠実に翻案した坂 (阪谷芳郎『經濟學史講義』(哲學書院。明治 20 年。)) は保護貿易擁護論と旧歴史學派 (國民經濟學派) の風靡に貢献したであろう。⁽²⁴⁾ コッサ財政學も明治末年まで影響力をもった。國家國民主義的理念に立つ旧歴史學派は、抽象的論理によって經濟の自由な展開に保障される貧富の樂觀的な予定調和以上に、國家を分斷する現實の社會的貧困、國富の偏在、膨張する階級利害の克服の道を模索した。かくて、「日本の經濟學の學生たちはこの理論を貪欲に摂取した。……それは、アダム・スミスの「神の見えざる手」よりも、明治社會の問題の解決のためにいっそう適合的に思えた」⁽²⁵⁾ からである。10 年後、金井延主導で移入される新歴史學派が、旧歴史學派と僅かに交錯する前史は、次のようなものであった。

「そこでは手當り次第に、いやしくも「經濟」と名のつくものは翻譯紹介され、祖述されたと推察され、しかも、「經濟學」なるものが翻譯者によつて、恣意的に解釋され、移入された」。雜然雜多な類書の中には、「致富の術（金儲けの學問、商人のための指南書）としての經濟」、「世渡りの杖（一名、經濟便蒙）」、「未來の商人（一名、功名の魁）」などの珍妙な訳書も数えられるという。「幕末から、明治初期にかけて、新しい學問として移入されたところは、學問としての、社会科学としての、經濟學を把握しようという努力があったわけではなく、ただ經濟・商業・産業活動一般の手引きとして、またそれへの鼓舞奨励として紹介される部面が多く、ことに原著を訳述するにあたって、訳者の主観的な好みに従つて、撰択し、抄訳し、概説し、註解し、主張するということが多く、たとえ同一の原著を台本としたとしても訳述者の強調する点の相違によって、わが国民の受ける印象や影響は著しく異なるものがあつたといえるのである。訳語の不統一はいうまでもないが、原著に関して甚だしく主観的解釈が加えられて紹介されたところに特質がある」。⁽²⁶⁾ 後続發進国に共通の「社会科学的空白」（住谷悦治）である。洋學移入に無方針の維新時の混亂に右往左往も右顧左眄も変節便乗も常態化していた。「明治初年における泰西文化のおどろくべき無方針の直訳的文化模倣時代が出現した・・・維新の變革直後における社会的・政治的混亂と危機と自主的批判の欠如した社会科学的空白の致すことであつた。」（同上）短命の「日本旧歴史學派」、わけても「忘れられた」諸淵が主体的自覺的に選択した「外からの近代化」は、西洋學術・制度文物の怒濤のような流入と無批判な歐化主義の潮流と、「空白」の趨勢を背景としていた。しかし、対極的先覺者として、諸淵と『農商辨』（文久元年〔1861〕刊）の神田孝平の、時代を先取りする「學問的」な姿勢を堅持しつつ、「經國濟民」の実踐的意図を共有した、独書ロツシャー「政治學・經濟學」と英書イリス「經濟學（ポリチカールエコノミ）」の移入が、僅かにその「空白」を埋める端緒となつた。

諸淵は、近代化の範と洋學輸出元が一方方向的にドイツ中心に轉換される「明治14年の政變」の直前に夭逝した。

さて、問題は次の二点に絞られる。ひとつは、後述するソクラテス論手稿後篇の「不知論」とはおそらく異なる基調の、本手稿前篇の内容の推定である。もうひとつは、諸淵手稿前後篇に唯一補註資料を残した住谷悦治が経済学・経済学史の学究として、数多の諸淵著訳書のうち、本前篇及び後篇に指目した消息である。

まず、本手稿前篇の内容推定の問題である。

諸淵には、通称周三の医学修養の青年時代から、いわば「治國學」を機軸とした政治経済社会論や国防戦争外交（兵学）問題に対する「上からの」強い関心があった。諸淵は、かつて高野長英らの俊英に多岐に亘る蘭語論文の作成を命じた恩師シーボルトの新たな依頼に応じて、長崎游学中の文久元年〔1861〕、「日本歴史蘭譯」、「日本國民文化的發達史」、「〔徳川〕幕府建設史—幕府の發生と其の理由」の蘭訳を矢継ぎ早に提出した。シーボルトは当時既に時代に遅れた医家であり、招聘した幕府に助言し交渉する外交顧問として再航し、活動の参考資料を求めたのである。諸淵は、その命じられた雑用で自彊の暇なきことを零しつつ、師宛てに一書を認めている。⁽²⁷⁾

「あなたがこの國に御出になつてヨーロッパの事情が特に知られて來ました。實にあなたがこの年〔安政6年（1859）—引用者〕當地へ來られたことは日本にとり非常に大なる幸福です。……國を富ますのに貿易をなすことは當然のことです。どの様にしてこれは行はるべきですか？外國では國王の命令によつて貿易船が來るのですか。どの様な品がヨーロッパから買はれませうか？

各國の興亡は如何ですか。現在ではどの國が強力で良く或は劣勢ですか？世界で有名な人は誰ですか？

當地で貿易を行つてゐるイギリス人及びアメリカ人の間で終には吾が國を取つてしまふということを少しでも考へてゐる人がありますか？……現今ヨーロッパ其他で戦争が起つてゐますか？」

上記一覧に見られるように、後年、諸淵は「行動する知性」にふさわしく、ハーグ市法令を直訳した「遊女論」、あるいは「專賣特許法制定意見書」、「社會黨撲滅ニ對スル獨乙法」、「獨乙陸軍々制」、公衆衛生学と国權論の關係を論じた「国

医論」といった手記訳稿を著している。墓碑に刻まれたように、佃島獄中での「牢死病（疥癬）」感染の経験から、画期的な行刑衛生改善の上申、建議をも行っている。同時に、諸淵は獄中で、師常磐井厳弋の開国論、シーボルトの開国主義に忠実であったか、幕府「譜代専制」の危急存亡に血路を開く開国論を持論として、「鎖港」（鎖国）の継続不可能を談じたという。のみならず、蔵書中にはB・フランクリンの独訳『自叙傳』（Benjamin Franklin's *Jugend Jahre*, Berlin, 1792, 214 p.）及び同書の写真5葉、及びカエサル『ガリア戦記註釈』（C. Julii CAESARIS Commentarii De Bello Gallie, Stuttgart, 1890, 264 p.）も遺されている。蘭英独語に通じ「口に缺舌を稱へ百卷の外書に親しみつゝも、内心烈々たる愛國精神を藏して」、当代随一の「新知識」と謳われた諸淵である。勤王家・諸淵には、幕藩体制下では一般に未形成の、それゆえ先進的な「日本国」（Volk oder Nation）の意識が確実に醸成されている。諸淵は「後年シーボルトに就いて、蘭學を修め、當時勝れた洋學者として世に立つに當つても、飽まで大和心を失はず、常に君と國とを念となし」⁽²⁸⁾ ていたという。そして諸淵末期の一言は、「新聞を見せて呉れ」であった。巷間の醜聞満載の所謂「小新聞」でなく、社説も投書も政論主体の「大新聞」を一読後、ソクラテスのように悠然として鎮まり、従容として瞑目したのであろう。最期まで諸淵に政治・国法・経済・兵学、及び社会的情勢への関心が絶えることはなかったと言えよう。

住谷補註にあるように、わけでも諸淵の手稿「獨文 政治學・經濟學」の執筆には、就中長崎游学中の文久元年〔1861〕、師シーボルトの依頼を受けた「日本歴史蘭譯」、「日本國民文化的發達史」、「〔徳川〕幕府建設史—幕府の發生と其の理由」の蘭訳作業と国史に関する豊富で確実な知見の蓄積が、間接的な引き金となったであろう。

本前篇手稿は諸淵の独文述作というより、「引用文献」と註記される、「旧歴史学派」ロッシヤーの記念碑的著作の簡便な抄録、あるいは手控えではなかったか、とも思われる。さもなければ、執筆時期から推して、攘夷・開国の宥和妥協論としての公武合体論と大政奉還を押し進める「蘭癖大名」の一人宇和島藩主・伊達宗城公のブレイン・トラスト（政治顧問団）の筆頭格として、諸淵

が助言構想の大略を独文で認め、発覚を憚り筐底に秘めたものかもしれない。

ともあれ、自書された「獨文 政治學・經濟學」は明治期に邦語「經濟學」と縮約、あるいは「理財學」（井上哲次郎）と翻訳される以前の、太宰春台の言う「經世済民」（「天下國家を治むるを經濟と云、世を経め民を済ふ義なり」）[『經濟錄』]、すなわち洋語 *Staatswirtschaft, Political Economy*）を本意とするであろう。思弁的封建教学に対する江戸時代の経験主義と、徂徠、宣長を始めとする文献学的「反形而上学的思想の蓄積」が、「内からの近代化」を準備していた。富永伸基と同様に、大坂懷徳堂に学び、幕府の統制經濟策を批判した經世家・山片蟠桃『夢の代』（卷之六）にも、壮大な宇宙論構想の下、「王道」經綸論と「民富」思想を機軸とする「經世済民」思想が生きている。のちの柳田国男の「民俗学」も、貧窮農民救済の「經世済民」を初源の発想としていた。したがって、「内からの近代化」と同時に、統治的な「上からの近代化」に制約される諸淵の本篇ソクラテス論は、この經世家の伝統的な「經世済民」、正確には「經國済民」論の史的文脈の枠組みと視角に限られた舶来の実学に収斂するに留まり、諸淵渾身のソクラテス論は後篇手稿に委ねられたと言えよう。

かくて、以下に見るように、この伝統的な挙国一致の「經國済民」論の史的文脈の継承と断絶、及び新知識の「輸血の学問」への学史的関心という三重の契機の下に、特異なソクラテス經濟思想の二類型が移入され、無批判に輩出された。諸淵の「國家經濟學」手稿前篇が先取りした「外からの近代化」と同時に、「重商主義」と齊家治國の「上からの近代化」に制約される一方で、功利主義・自由主義經濟学による民間の「内からの近代化」が風靡し、爾後「封建制度は親の仇でござる」・「一身獨立して國家獨立す」の気概が、意図せぬ「一身の功利」に反転する。「アダム・スミス氏が初めて此學科を建立……けだし經濟の要旨は、全く國家の利益を計り、日常實着の行爲を重じ、決して高尚びようぼうの理論に傾かざるを要す」（關新吾）。江戸時代の「經國済民」論を前者は回帰継承、あるいは換骨奪胎し、後者は学理として放棄しつ、一線を画して、それぞれのソクラテス論を押し立てた。

しからは、なぜ「經濟錄」でなく、「經濟學」であったか。（傍点、筆者。）

ことさらに「西洋」の二文字を書名に附して、旧習との断絶を強調した神田孝平は、「^{ポリチカルエコノミ}經濟學、國家の急務にして學者の忽にすべからざる所のもの」としている。(同『經濟小學』[慶應3年(1867)刊。]同内容の別題本『西洋經濟小學』[明治元年(1868)刊。])同じく福沢諭吉『西洋事情外編』(慶應3年[1867]刊)に、「ポリチカルエコノミー」を「經濟と譯す・・・國民、家を保つ^の法と云へる義」と割註され、同『學問ノススメ』(四編、明治7年[1874]刊)では、經濟は「人身窮理ノ義・・・其ノ定則」と解説されている。先駆的と評される西周の周到な「經濟學」の起稿年代ですら、明治10年代と推定されている。諸淵は既に慶應2年[1866]の本篇手稿で、「政治學」及び「經濟學」の語を自書している。諸淵にとって「經濟學」とは、ロッシヤーの「經國濟民」學を意味したはずである。一方、後述するように、文久2年[1862]、オランダ留学を通して「經濟學」を最優先に、革新的な「治國論」5科の修得に勤しんだ、諸淵旧知の啓蒙思想家・西周は、『百學連環・第二編』(明治3年[1870])で次のように不満を述べている。「人生三寶」、すなわち「健康・知識・富有」を、西の持する功利主義と自由放任政策、古典派経済学^のの理解を通して、人生究極の目的たる「(一般)最大福祉」の実現原資とする構想がその背景にある。本格的な彌兒[ミル]著／西周譯『利學』の刊行は、明治10年である。

「Political Economy、此イコノミーなる語は、希臘のοικονομο、英のhouse、希のνομοσ、英のruleにして、即ち家法といふ字なり。我が國にては之を身上、世代、臺所向、勝手向、操廻、工面、などといふ意に同し。之を漢字に譯するときは居室、居家、等に當るなり。(居家必要なる書あり。)なほ其他に文字を求むるに營生、活計(我が國にて之をスギハヒと言ふ。)、貨殖等あり。(士不受命而貨殖)、都て人生、活の道を得て富有に至るの意なり。之を唯イコノミーとのみ言ふときは一家のことにあたると雖も、今ポリチカルイコノミーといふときは即ち國家の制産に係はるところなり。近來津田[眞道]氏世に之を譯して經濟學と言へり。此語は經世濟民より採り用へたる語にして、専ら活計のことを論するには適當せざるに似たり。故に余は孟子の制民之産の語より採りて、制産學と譯せり。凡そ民の産を制するには、必ず其主たるもの

なかるへからす。故にポリチカレイコノミーなる語に大概當るへしとの考へなり。」(『西周全集4』所収、宗高書房、昭和56年。)

訳語「制産學」の適否は別にして、同時に、西は「西洋の古昔」希臘の經濟「学史」を素描しつつ、学史的慣習から軽くソクラテス伝に言及する。それにもかかわらず、ソクラテスが「制産學(經國濟民)」の学祖たる所以の説明は皆無である。「ソカラテス其讒言に依りて官府より入牢せられ、まさに殺されんとせしか、如何そ人の手に掛かりて死することをせむとて、自ら毒を飲んで死せり、歳七十有餘なり。總て以前の學は天地の道理に就て論せしか、此ソカラテスより人の性より論するに至れり。・・・漢儒に比するときはSocratesは孔子に當り、Platoは會子に當り、Aristotleは孟子に當るなり。・・・アリストテレス以上ソカラテス及びプラトを正統の學とし、以下を異統の學派とす。」(同上。)

そもそもロッシャーの *Grundriss* (『國家經濟學講義要綱』)「第四編 學說史 第五十六節 古代」の項には、ソクラテス論のみならず、古代經濟思想史自体が素描されない。「要綱」形式の所以か、古代原典中心の参照文献の列举のみに留まり、プラトン、殊にアリストテレス関係文献は多少豊富であれ、ソクラテスについては、次の僅かな指示の一節があるにすぎない。⁽²⁹⁾

「・・・エリキシアス *Eryxias*・ソクラテス *Sokrates*・・・の國家經濟學的見解。・・・クセノフォン *Xenophon* の著書。Memorabilia Socratis. IV (『ソクラテスの追憶』)。」

「エリキシアス *Eryxias*」とは、現在のプラトンの対話篇『エリュクシアス』を指している。16世紀のステファヌス版プラトン全集(H.Stephanus, *Platonis opera quae extant omnia*, 1578)以来、偽書と推定される対話篇である。無論、希臘語・羅旬語に堪能でない諸淵がこの対話篇を蘭英独語の近代語訳で閲読し、ソクラテスの弟子クセノフォンの『追憶』と併読することで、ソクラテス自身の「國家經濟學的見解」に迫り得たか否かは、判然としない。諸淵が閲読したはずもない、ロッシャーの単發論文“Ueber das Verhältniss der Nationalökonomik zum klassischen Altertume”(1849)にも、ソクラテスへの言

及はないのである。

ところで、旧歴史学派の申し子として、理論理性に対して実践理性を重視したカントとは逆に、価値合理性より目的合理性（事実問題）を優先したM・ヴェーバーは、膨大な諸著作に学説の展開も変遷もない師匠筋「ロッシヤーの歴史的方法」の剔抉を試みた。後年、学問の目的設定と手続きに一定の党派性や世界観の前提を不可避とする、没価値論・価値自由論のジレンマと、無前提論の崩壊に直面するとはいえ、「ロッシヤーの歴史的方法」に、史実より概念の体系化を急ぐ「ヘーゲルの退化」、すなわち不十分で「表面的」な歴史認識の論理的不徹底を指摘した。主文献資料として、Roscher, *Leben, Werk und Zeitalter des Thukydides*, Göttingen, 1842. [『トゥキディデスの生涯・著作・時代』（ゴッティンゲン大学での最初の講義原稿）]、及び上記 *Grundriss*（『國家經濟學講義要綱』[1843.]）が精選されている。しかし、博覧強記のヴェーバーにして、ロッシヤーが文献指示に止めたソクラテスには一瞥も投じない。『古代社会經濟史—古代農業事情』（増田四郎監訳代表、創文社、昭和34年、254頁。）で一度だけ言及される、クセノフォン『思い出（＝追憶）』のソクラテスは、「奴隷労働による自由人労働の圧迫」の文脈に限られている。それどころか、ソクラテス論を含むと予想されるロッシヤーのラテン語学位論文 *De historicae doctorinae apud sophistas maiores vestigitis*, 1838 [『偉大なるソフィスト達に據る歴史學説』] を、ヴェーバーがテキストに採用しない、然るべき「没価値的」理由もまた不明である。

このように諸淵の手稿「獨文 政治學・經濟學」は、旧歴史学派の「政治經濟學」、「國家經濟學」、「人民經濟學」を吸収して、「外からの」及び「上からの」「經世濟民」論の洋學化に成功したように思われる。しかし、後年のヴェーバーとは異なって、幕末・明治2、3年時の、「修身齊國家・治國平天下」を嫌った西周の功利主義・自由主義的な非統制經濟論も、諸淵のドイツ旧歴史主義派に拠る保護貿易擁護論的な本手稿のいずれもが、支持学説の如何にかかわらず、学史的関心から、ソクラテスに言及している。試みに、文久元年[1861]から明治31年[1898]までのわが国の西洋政治經濟学史研究文献中、ソクラテス論

を展開する、諸淵、西以降の記事論文著訳書を、社会主義関連文献とともに、各文献に補綴しつつ以下に摘記する。

[・明治3 (1867) 加藤弘之『眞政大意』(上下2冊、山吹屋佐兵衛等) [*筆者註一下巻に、本邦における「コミュニスメ」と「ソシアリスME」記事の初出。]]

[・明治4 (1868) 彌爾 [ミル] / 中村敬太郎 (正直) 譯『自由之理』(巻之四、木平謙一郎。「ソーシアリスト」]

[・明治4 (1868) 若山儀一『保護税説・同附録』(出版者不明。)]

[・明治6 (1872) M・G・フォーセット / 林正明譯述『經濟入門』(求知堂。)]

[・明治7 (1873) 加藤弘之「福澤先生に答ふ」(コンムニスト。)明六雜誌2]

[・明治7 (1873) 杉亨二「想像鎖國論」(コンムニズム。)明六雜誌32]

・明治8 (1875) 津田眞道『如是我觀』(「希臘古賢プラト」、「ショコラテス妓ト游ブ論」、瑞穂屋卯三郎。)

・明治8 (1875) 飛田偽道「〈論説〉讀ショコラテス與妓遊論」

朝野新聞484 (3/28)

・明治9 (1876) (在東京) 難木元成郵送「娼妓優劣論」

(希臘ノ大聖ショコラテス等) 朝野新聞962 (11/12)

[*筆者註一当時盛んな輿論の一斑に廢娼賛否論がある。諸淵の「遊女論」は、ハーグ市法令を邦譯した明治2年 [1869] 頃の訳稿と推定され、廢娼運動の起点となる、明治5年 [1872] の「マリア・ルーズ号事件」以前の訳業で、極めて先駆的である。その後、太政官布告の規制があり、各種の淫賣論・淫賣史・賣笑史関係の刊本が出版される。津田眞道以下の論考は、廢娼賛否論にもソクラテスを例示する、興味深い論考・社説・投書である。万国史、西洋史、希臘史、羅馬史の知識が想像以上に流布していることが知られる。なお、諸淵訳稿

「遊女論」の筆者註、参照。後掲の文献「明治19（1886）乗竹孝太郎「經濟學者列傳—ソクラテス（Socrates）の傳」東京經濟雜誌344, 345、にも割註に妓女論がある。]

・明治9（1876）（西黒門町）中山松淵「自由論（仮題）」（ソクラテスノ冤刑）
朝野新聞923（9/27）

・明治9（1876）社説「政畧篇第三・貧富均等ヲ論ス」（ソクラテス、顔淵等）
郵便報知新聞931, 932（3/12, 13）

[*筆者註—均分相統制導入の議論に、ソクラテスが例示されている。]

[・明治10（1877）高橋達郎譯『交際及政體』（R・オウエン、フリーエ。モア「ユートピア」の本邦初出。文部省百科全書12-4、文部省。)]

[・明治11（1878）社説・福地源一郎「僻説ノ害」（共同黨[コムニニズム]。東京日々新聞6月6日付。)]

[・明治12（1879）頃 西周「社會黨論ノ説」（公共黨[ソシアリスト]、通有黨[コムニニズム]。マルクスを知らず。手稿（『西周全集4』所収、宗高書房、昭和56年。)]

[・明治14（1881）小崎弘道「近世社會黨ノ原因ヲ論ス」（K・マルクス、F・エンゲルス、本邦初出。六合雜誌1-7]

[・明治15（1882）藤田四郎『歐米政黨沿革史總論』（社會主義。自由國民出版。)]

[・明治15（1882）ウールセイ／穴戸義知譯『ウールセイ古今社會黨沿革論』（5冊、弘令社出版局。)[*筆者註—一部プラトンを論じた、第1章「古今社會主義ノ解釋及性質」。「マアクス氏 社會説ノ要領」は、第5章「日耳曼社會説」にある。]]

[・明治16（1883）澁谷慥爾譯『政談（上下）』（下巻、社會主義。自由國民出

版。)]

・明治17 (1884) コッサー／中川恒次郎譯「太古及中世理財學沿革史」學術
經濟雜誌 1 〔*筆者未見〕

・明治18 (1885) コッサー／中川恒次郎譯「太古及中世理財學沿革史(承前)」
學術經濟雜誌 2 〔*筆者未見〕

・明治18 (1885) 伴痴齋(直之助)「古代經濟沿革史」(伊國經濟學士コッサ
氏。東京經濟雜誌253, 254, 255, 256

・明治19 (1886) 乗竹孝太郎「經濟學者列傳—ソクラテス(Socrates)の傳」
東京經濟雜誌344, 345

[・明治19 (1886) ラー子ッド／宮川經輝譯・土居通豫編『經濟新論』(社會説、
社會黨、共產黨。任天書屋。)]

[・明治19 (1886) - 20 (1887) 中川恒次郎『經濟實學講義』(卷之一、二。岩
本米次郎。)]

〔*筆者註—ロッシャー、コッサ等を中心に旧歴史学派及び
社会政策学派の実学学説を導入した一書。「小引」には「古
のアリストートル、プラトー諸先生の著書又は支那の經籍を
見ても明かなるべし」とあるが、希臘・羅馬時代の史的事例
はほぼ「古代碩學ブルターク氏」より採録。ソクラテス論は、
ありそうで、ない。学史でなく、「実学」と題されている。〕

・明治20 (1887) 坂(阪)谷芳郎『經濟學史講義』(ソクラテス。哲學書院。)

〔*筆者註—L・コッサ著の翻案。本邦初の西洋經濟学史書。
同『經濟沿革史』[專修學校、明治24年[1891]も、ほぼ同
内容。→昭和5年[1930]、コッサ著／關末代策譯『經濟學史』
(新譯増補版、巖松堂。)として刊行。〕

・明治20 (1887) 乗竹孝太郎「經濟學史講義」(ソクラテス。國民之友10

〔*筆者註—前年刊行の阪谷芳郎『經濟學史講義』への辛辣
な書評。間接的なコッサ批判になっている。〕

・明治20 (1887) 和田垣謙三「ソクラテス氏ノ傳」東洋學藝雜誌4-69

[*筆者註—刑死と不知論が要諦のソクラテス傳。]

・明治20 (1887) フレデリック・ボルロック／谷信太郎譯「政治學沿革史」
中央學術雜誌44, 47

ウィリアム・ボルロック／天外逸史譯「政治學沿革史 (承前)」中央學術雜誌52

ウィリアム・ボルロック／暘城居士 [鹽島仁吉] 譯「政治學沿革史 (承前)」中央學術雜誌54

[*筆者註—プラトン、アリストテレス政治學展開の前提としてソクラテスが簡略に論じられている。47號。]

[・明治21 (1888) 和田垣謙三「講壇社會黨」(社會主義、初出?。)
國家學會雜誌2-13]

[・明治21 (1888) 岡田良平「社會主義の正否」哲學雜誌2-18]

[・明治21 (1888) 元良勇次郎「所有物ノ性質ヲ論シテ社會主義ヲ評ス」
文1-25]

・明治21 (1888) 乗竹孝太郎『經濟學原理篇講義』(出版者不明。)

[*筆者註—コッサ使用か?]

・明治21 (1888) 伊・博士コッサ氏原著／文學士天野爲之・政學得業生利光
孫太郎編輯『經濟學の性質』(東京專門學校政學部講義錄。)

・明治22 (1889) 乗竹孝太郎『經濟 [理財] 學歴史篇講義』(明治法律學校
講法會。)[*筆者註—コッサ使用か?→乗竹
ろく [綠] 編『肅堂遺稿・經濟學』所収、
經濟雜誌社、明治45年。]

[・明治22 (1889) F・リスト／大島貞益譯・富田鐵之助校閱『李氏經濟論』(上
下2巻、日本經濟會。)]

[・明治24 (1891) 大島貞益『情勢論—一名、保護貿易一斑』(煮海館。)]

[・明治24 (1891) ラーネット／浮田和民譯『經濟學之原理』(社會主義、共
産主義。) 經濟雜誌社。]

・明治25（1892）鹽島仁吉編纂『泰西 經濟學者列傳』（經濟雜誌社。）[*筆者註—古代思想家で論じられているのは、ソクラテスの他、ゼノフォン、プラトーン、アリストートル、カトーン、ヴァルリー、プリニー父子。他は近代思想家。]

[・明治27（1896）濱田健次郎・伊勢本一郎『經濟學史』

（ソクラテス。八尾新助。）

[・明治29（1898）ロシア著／平田東助・平塚定次郎・武内常太郎・湯川寛吉譯『商工經濟論』（上下2巻、國文社。ロシア著の本邦初譯書。）]

[・明治29（1898）大西祝「社會主義の必要」六合雜誌191]

・明治30（1897）太田秀穂「西洋哲學者の經濟思想」哲學雜誌137 [*筆者註—主として「ロッシエル氏 [W・ロッシャー]」に拠る。]

・明治31（1898）井上辰九郎『經濟學史』（東京專門學校政治經濟學科第3回1部講義録、東京專門學校。）[*筆者註—本書第1回講義録は、明治20年代初頭の刊行と推定されている。奥付に発行年代未記載により、不明。]

本一覽中、纏まったソクラテス經濟思想への言及の初出は「コッサー／中川恒次郎譯「太古及中世理財學沿革史（1, 2）」學術經濟雜誌1, 2、明治17, 18年。」と信ぜられる。本邦初の西洋經濟学史書たる坂（阪）谷芳郎『經濟學史講義』（哲學書院、明治20年。）が、ソクラテス經濟論を含む同じコッサの翻案だからである。⁽³⁰⁾ 現在、ソクラテス論初出が検証可能な文献は、翌年、偽書説を踏まえつつ、プラトンの對話篇『エリュクシアス』を論拠とした「伴痴齋（直之助）「古代經濟沿革史」（東京經濟雜誌253, 254, 255, 256號、明治18年。）」である。この伴邦訳論文もまた、ライプツィヒ時代のロッシャーの弟子「伊國經

濟學士コッサ氏」に依拠している。明治6年[1873]頃から広く流布するフォーセット(夫人)／林正明譯述『經濟入門』(明治6年。)に次いで、明治20年[1887]前後以降の「わが国でフォーセット＝自由主義からロッシヤー＝歴史学派への媒介」の役割を果たしたのが、「従来の古典学派の上に歴史学派的な色彩」を加えたコッサの諸著であった。⁽³¹⁾ フォーセットの入門書は、初学者用の、非歴史的・功利主義的なスミス亞流自由主義經濟思想の簡約版である。15年以上の時を閲して、時代がようやく諸淵、また西周の「学」的な先驅の水準に追いついたと言えよう。

それに対して、同じく自由貿易擁護論者で「古典派經濟学の亜流、J.S.Millの經濟学の祖述者 McCulloch の影響」下にあった乗竹孝太郎は、「ソクラテスが經濟學上に遺したる偉功」を認めながら、「氏の説を載せたる問答書は批評家或は偽撰に係ると爲す者ありてソクラテスの説ふるや否やは尚ほ判然せざる」(下線、原文)と慎重に判断を留保している。(乗竹「經濟學者列傳—ソクラテス(Socrates)の傳」東京經濟雜誌345號、明治19年、752頁。)田口卯吉の弟子・乗竹も、論拠としてのプラトンの對話篇『エリュクシアス』及びその偽書説を熟知していた。それにもかかわらず、經濟とは何かの重大な定義に不可欠の、「富」の概念史の濫觴を性急にソクラテスに求めている。「若し又之をして果して偽撰ならしむも氏は實に人事學の開祖にして經濟學亦人事學の一なるが故に氏以て經濟學士列傳の第一位に置くこと敢て不當に非ざる可きを信ずる。」

一方、阪谷芳郎や伴痴齋の公表した、ほぼ同時期に移入のコッサのソクラテス經濟論は、以後その定型化した論法が踏襲され、鹽島仁吉編纂『泰西經濟學者列傳』(明治25年、21-22頁。)を頂点に一応の集約を見る。しかし、コッサを襲用しただけの鹽島に論旨の發展も深化もなく、それどころかソクラテス經濟思想の心髄は、コッサを先取りした伴邦訳論文から剽窃の常套句で解説されたにすぎない。その「富=購買力」と解釈する、おそらく最も素朴な「重商主義的」解説の全句—

「ソクラテスは、・・・富の性質を檢究して頗る詳密なる見解を下したるを

知るべきなり蓋し氏は衣服飲食の人生に必要なを述べて富の世に發生する所以を説き又人類の需要に供すべき物品を以て富と爲し更に進みて有形と〔知識、才藝の如き〕無形とを問はず將た其性質の如何を論せず苟も交易して必要の物品を得べき者は悉く之を富の中に包括せり之を約言せば氏は明らかに購買力を以て富と解釋せり」。

古代ギリシアのポリス世界は、国家財政と家政を峻別する近代経済学とは異質の前提に立っていた。ギリシア思想の正統的集成と評されるアリストテレスは、ポリスを「家」の延長として把握し、大規模な「家政（＝家産管理）」（オイコノミア）を国家財政の維持と既存秩序の崩壊防止策として肯定した。それゆえ、生産や流通、交易の商業活動の必要は容認される一方、利潤の追求、就中利子の取得は厳禁された。貨幣を流動「資本」化させ、不等価交換を通して「資本の蓄積」を生み出す「貨殖術」が、貧富の格差増大に不可避の自由市民の没落と、ポリスの分断解体の主因とされたからである。（『政治学』1257b10-1258a10）同時に、師プラトンの「婦女子及び私財の共産」論（同上、1260b30-1263b10）の非人間的反自然性が批判された。この視角からすれば、素朴なソクラテス「重商主義者」論も、ありうべき解釈のひとつと言えよう。

しかし本来、「経済思想の胎生の時代」、つまり「ギリシア哲学における経済思想」の史的概観の端緒を、ソクラテスに求めることはできないであろう。その劈頭に指定されて然るべきは、樂園から濁世への人類発展史の「墮落史観」―「黄金の時代」、「銀の時代」、「青銅の時代」、「英雄の時代」、「鉄の時代」―、このヘシオドス『労働と日々』で謳われる五時代説話に特徴的な「経済現象に對する最初の思索」である。したがって、近代「科学としての経済学」のみならず、「経済学以前の経済思想」をも編述する旧歴史学派の先蹤は、むしろ哲人ソクラテスを3世紀遡り、一攫千金的な交易よりも、額に汗する「労働は恥にあらざる」倫理を最初に唱導した農民詩人ヘシオドスと言えよう。

実際、ソクラテス経済思想の論拠が、ストア思想の反映から時代錯誤的な偽書と推定されるプラトンの対話篇『エリュクシアス』を排して、真贋問題のないクセノフォン『家政論』（Oikon.5.17）に求めた近代経済学に著名な事例があ

る。⁽³²⁾ かつて自然法と自然的秩序を重視して、富の唯一の源泉を土地と農業生産に求めたケネーが、『経済表』（1758年）に引いた、そのソクラテスの古拙な「重農主義」、あるいは古代ギリシア流農本主義を語る言葉―

「農業は他の技能の生母であり、乳母であると言った人の言葉はまことに當れりと言ふべきである。何故ならば農業にして良好なる状態にありとすれば、その他のすべての技能は榮へるが、荒廢やむなきところでは他の産業活動は陸においても海においても衰へるからである。」

諸淵はロッシャー *Grundriss*（『國家經濟學講義要綱』）の文献指示を通して、偽書説を別にすれば、古拙「重商主義的」な「富＝購買力」と解釈する思想的論拠、史料としてプラトンの偽對話篇『エリュクシアス』とクセノフォンの『追憶』を知っていた。しかし、乗竹孝太郎がその前で躊躇したコッサ指示の偽書對話篇説ばかりか、ロッシャーに指示のない当該原典クセノフォン『家政論』（Oikon.5.17）も知り得なかったと思われる。

かくて、諸淵のソクラテス論手稿前篇の内容は、二通りに推定される。ひとつは、刑死を要諦とするソクラテスの「人」、行伝に限った陳腐な伝記の点描。もう一つは、15年後、ロッシャーの「皮相な」祖述者・コッサに倣って、伝記を交えつつ寸描される、古拙な「重商主義」者のソクラテス論である。外発的な学史的関心の域を出ないとはいえ、後者に高い可能性を残すと推定できよう。諸淵はロッシャー『國家經濟學講義要綱』を介して、近代經濟の流通・貿易面を重視する「重商主義」（メルカンティル・ジステム）と、その生産面に焦点を合わせ、「重商主義」を批判してスミス古典派經濟學を準備するケネーの「重農主義」（フィジオクラティー）の双方の動向についても、その史的文脈を理解していたからである。しかし、古拙な「重農主義者」のソクラテス像を、諸淵は終に想定し得なかったと思われる。

註

- (1) 諸種ある伝のうち、三瀬諸淵^{もろぶち}の最も簡にして要を得た事績略年譜を、大阪阿倍野から出生地の伊予大洲・大禪寺の丘辺に改葬された墓表から採録した。この墓碑は中央、地方を問わず、「例によって」と称される讃仰、貴紳顕彰の習性に倣った「聖人」頌徳に偏らない。蚕社の獄で獄死した橋本左内の上申書以来の行刑衛生への貢献という、類を見ない事績が刻まれた稀有の碑文である。大津正雄「三瀬諸淵」（日本刑事政策研究会編『日本刑事政策史上の人々』所収、日本加除出版、1989年、157頁。）引用した碑文には、適宜補註を加えた。いわば国事犯の橋本左内も諸淵も医師であった。「惜しむらくは、諸淵が余りに早く世を去ったために、その業績が詳らかでなく資料散逸して世に忘却されているが、日本に伝来せんとした西洋医学を卒して学び、これを行刑衛生の実践に身をもって生かした先駆者として、その経歴、力働、識見が諸淵ほどふさわしい者が他にあるべきはずはない。」（大津「三瀬諸淵—蘭医シーボルトの高弟獄中より獄制改善を献言」、罪と罰3巻4号、昭和41年、29頁。）石井良助「林子平—刑事政策はじめ藩政改革について仙台藩に山海の建白」、罪と罰4巻2号、昭和42年、及び「三瀬諸淵先生の頌徳碑」、中外醫事新報1152、昭和4年、参照。

なお、本稿は拙編著『日本西洋古典學文獻史』（中谷英明領域代表、科研費補助金特定領域研究A、全4巻、田中プリント、平成13–15年。第4巻CD版は現在、増補改訂中）の一部を利用した副産物である。

- (2) 安永梧郎『馬場辰猪』、私家版、東京堂發賣、明治30年、1-2頁。（覆刻版、みすず書房、1987年。）長井石峰『蘭學大家 三瀬諸淵先生』、不偏閣、昭和3年、1頁。
- (3) 広瀬隆『文明開化は長崎から』下巻、集英社、2014年、379頁。「外からの近代化」、及び「内からの近代化」、「上からの近代化」、「下からの近代化」は、鈴木直の造語のようである。（鈴木直『輸入学問の功罪—この翻訳わかりますか?』、ちくま新書、筑摩書房、2007年、99-105頁、参照。）
- (4) 小林秀雄「歴史と文学」（『小林秀雄全集7』所収、新潮社、平成13年、201頁。）「改造」3月號、昭和16年、初出。
- (5) ロジェ・シャルティエ、グルエルモ・カヴァッロ共編／田村毅他共訳『読むことの歴史』、大修館書店、2000年、8頁。野家啓一『物語の哲学』、岩波現代文庫、岩波書店、2005年。
- (6) 藤本夕衣『古典を失った大学』、NTT出版、2012年。本書の刊行は、アラン・ブルーム／菅野盾樹訳『アメリカン・マインドの終焉』、みすず書房、1988年、から14年後である。なお、明治期に、専門的と一般（国民）的とを区別して、「教養」の語を用いた稀な例に、小野梓「論通常之教養」（共存雑誌1號、明治8年。）

がある。「教養ノ盛衰ハ文化ノ汚隆ニ係リ、國家至治ノ名、唯文化ニ待ツノミ有ルノミ。故ニ教養ノ事、國家政治ノ要タルナリ。教養ニ二類アリ。曰専門、曰通常・・・・」。(松本三之介・山室信一校注『学問と知識人』所収、近代日本思想大系10、岩波書店、1988年。)

なお、ソクラテスを例に、古典に「人」を読み、内省する典型的な「求道」としての修養が鼓舞されている。和田垣謙三はドイツ歴史学派の経済学説を紹介した一人。

「・・・人ノ學フヘキ所ノ者ハ人ナリトハ是ソクラテス氏ノ語ニテ蓋シ千古ノ名言ナリ人ヲ學ブトハ則チ己ヲ知ルノ謂ナリ・・・人ヲ觀ルナリ・・・己ヲ顧ルナリ・・・諸君ハ今ソクラテス氏ヲ見ラレタリ果シテ其聖人タルヲ覺ラレシナラン東西相去リ古今相隔タルト雖モ彼我ノ亦甚ダ相近キ者アルヲ悟ランシナラン彼モ人ナリ我モ人也我何ゾ必ズシモソクラテス氏タルヲ得ザランヤトノ慷慨ヲ惹起サレシナラン・・・」(傍点下線、原文。和田垣謙三「ソクラテス氏ノ傳」東洋學藝雜誌69號、明治20年、434頁。) 古人曰く、「賢を行はんとして、自ら賢とするの心を去らば、いづくんぞ往きて美ならざらんや。」

- (7) 住谷悦治「幕末・明治の蘭學者三瀬諸淵先生の譯書發見」夕刊大阪新聞・5月9-12日、昭和12年。同「三瀬諸淵の譯書發見さる一傳記補完への貢獻」海南新聞・5月28日、昭和12年。同「三瀬先生の譯書を發見して」醫海時報6-7月、昭和12年。同「日講記聞藥物學の發見」開化4號[昭和12年]。同「三瀬諸淵の訳書『日講記聞 藥物學』と『日講記聞 原病學各論』の發見」(同『鶏助の籠』所収、中央大学出版部、1970年。)

ソクラテス論二手稿の消息については、住谷「井蛙脱皮のエスベラント—転換期の学者「三瀬周三」の生涯と功業—日本史発掘32」、日本及日本人1504号、1977年、124-25頁、及び同「三瀬諸淵の研究」(賀川英夫編『日本特殊産業の展覧』所収、ダイヤモンド社、昭和18年、490-91頁。)、参照。三好昌文「三瀬周三」(『愛媛の先覚者2』所収、愛媛県文化財保護協会、1965年、105頁。なお、住谷論文にある、ソクラテス論前篇を三瀬家から満州へと借り出した「豊田博士」は特定できない。

- (8) 横田傳松「忘れられた三瀬諸淵」、中央史壇5巻2號、昭和11年、327-28頁。藤森成吉は、「この主人公の名は、一般人にはなほ耳新しいであらう。ばくが書くまで、醫學専門家のあひだでさへほとんど知られてゐなかつた」と述懐している。(藤森『若き洋學者たち』、日新書院、昭和17年、1頁。) 当時、高野長英の後継者と目された、諸淵の岳父にあたる大野昌三郎もまた「忘れられた」兵学者である。(三好昌文「忘れられた洋学者—伊予宇和島藩士 大野昌三郎」松山大学創立70周年記念論文集、松山大学、1994年。)

当時珍しかった写真が多数伝存している。東洋文化協會編『幕末・明治・大正回顧八十年史』22號、東洋文化協會、1937年。村上清子『国立国会図書館写真帳・写真集の内容細目総覧：明治・大正編』、国立国会図書館、1987年。

諸淵のギリシア哲学研究に関するモノグラフは存在しない。住谷悦治「井蛙脱皮のエスペラントー転換期の学究者「三瀬周三」の生涯と功業—日本史発掘32」、同論文、124-25頁、及び同「三瀬諸淵の研究」、同論文、490-91頁、だけが、手稿散佚の消息に補註した不可欠の文献である。管見の限りでは、他文献として、本稿註(9)の藤森成吉論文、また同『若き洋学者たち』、穂積重行『明治—法学者の出発—穂積陳重をめぐって』、三好昌文論文があるのみ。いずれも住谷論文に依拠している。

「住谷悦治は『三瀬諸淵の研究』の附録4「三瀬諸淵遺品蔵書目録」に、①遺品35点を挙げ、その中には諸淵の備忘録・略年譜・書簡6通が確認されている。②蔵書はA洋書20点、B和書42点があり医学書も含まれている。③写真109点、周三と交遊のあった人物と判明する。④諸淵著訳書23種、周三が精通したのは蘭語・英語であったと見られる。「英文典」、22歳の時シーボルトとともに作製したとされる「日蘭英仏対訳大辞典」、佃島在獄中という「独英仏対訳集」などの語学書、「日本国民文化発達史」「幕府建設史」などの日本研究、「独文 政治学・経済学」におけるギリシャ哲学、ヨーロッパの政体・経済・財政に関する研究(明治2年頃)、その他多くの医学書がある。⑤三瀬諸淵関係文献目録は112点に達し、戦前における周三研究の豊かな蓄積が分かる。大正6年から昭和15年までに、周三の業績に関する各種講演会・展覧会は14回に及んでいる。」(三好昌文「三瀬周三考」、シーボルト記念館「鳴滝紀要」8、1998年、23頁。)

戦後も特別展覧会が開催されている。直近では、「三瀬周三展：第9回特別展」(於シーボルト記念館、1997年)、「シーボルト最後の門人：三瀬諸淵の生涯」(於津山洋学資料館、2002年)、「三瀬諸淵：シーボルト最後の門人」(於愛媛県歴史文化博物館、2013年)。特別展図録が刊行されている。

住谷「井蛙脱皮のエスペラントー転換期の学究者「三瀬周三」の生涯と功業—日本史発掘32」、同論文、118頁。)によれば、明治29年刊の呉秀三の大著『シーボルト先生』以降、住谷が遺品・遺稿の文献整理をした昭和12年までに、諸淵関係文献は100人にもおよぶ研究者による、「わたくしなどの眼に触れない文献業績を含めれば百篇以上」あったはずだという。

一方、諸淵の蘭学は、中江藤樹の学統、常磐井厳弼の国学神道とともに、現在の「大洲教学」、すなわち郷土史教育の中核をなしているという。(清水英「中江藤樹と日本陽明学の学統たち」(農山村文化協会編『江戸時代、人づくり風土記』所収、参歩企画、1997年、187頁。)

なお、本稿で「ソクラテス」と記す人名は、幕末および明治期では、宛字「瑣格刺底」やカタ仮名「ショコラテス」を始めとして、夥しく多種多様に表記されている。宛字外来語辞典編集委員会編『宛字 外来語辞典』、柏書房、1979年。及び拙編著『日本西洋古典學文獻史』、前掲書、CD版第4巻「人名索引」〔現在、増補改訂中〕、参照。

- (9) 住谷悦治「三瀬諸淵の研究」、同論文、489-492頁。及び津山洋学資料館編『平成14年度特別展 シーボルト最後の門人 三瀬諸淵の生涯』一滴11、津山洋学資料館、平成14年。『三瀬諸淵 シーボルト最後の門人：特別展図録』、愛媛県歴史文化博物館指定管理者イオテックターサービス株式会社、2013年。愛媛県歴史文化博物館編『特別図録「三瀬諸淵」』、愛媛県歴史文化博物館、2013年。長崎市教育委員会編『シーボルト記念館資料目録(1)』、長崎市教育委員会、1989年。中西啓『シーボルト前後—長崎医学史ノート資料Ⅰ：麦酒醸造説』、長崎文献社、1989年。同「三瀬諸淵訳稿「国医論」(仮題)」、シーボルト記念館「鳴滝紀要」4、1994年。徳永宏「資料紹介「遊女論」について」、シーボルト記念館「鳴滝紀要」3、1993年。会田恵・寺畑喜朔「三瀬諸淵訳『愈里伊羅安〔ユリーラー〕検査書』について」、日本医史学雑誌34巻1号、1988年。文献表の諸処に、引用者が追補加筆訂正を加えた。

なお、本文中、(三)「日蘭英佛対訳日本大辞典」(萬延元年〔1860〕、22歳。長崎出島でシーボルトと共作。)、(六)「日本歴史蘭譯」(蘭文。文久元年〔1861〕、23歳。シーボルトの依頼による。)、(七)「日本國民文化的發達史」(蘭文。文久元年〔1861〕、23歳。シーボルトの依頼による。)、(八)「〔徳川〕幕府建設史—幕府の發生と其の理由」(蘭文。文久元年〔1861〕、23歳。シーボルトの依頼による。)は、緒方富雄・大島蘭三郎・大久保利謙・箭内健次編「門人がシーボルトに提供した蘭語論文の研究」(日獨文化協會編『シーボルト研究』所収、岩波書店、昭和13年。)に、いずれも収録されていない。

今なお戦前の住谷論文「三瀬諸淵の研究」を凌駕する水準の諸淵論はない。諸淵の「個々の業績については概略が示されている程度で、一次資料(周三の書簡、日記、公文書など)を用いた詳細な研究はあまり見られず」、「むしろ、長井音次郎らの史料批判を抜きにした著作を始め、それに依拠した文献の氾濫が拡大している現状がある。」(徳永宏、同論文、187頁。三好昌文「三瀬周三考」、同論文、9頁。現在では、三好論文「三瀬周三」(『愛媛の先覚者2』所収、前掲論文)が、住谷批判を含みつつ、大部で目配りも効き、最も優れているように思われる。

一方、蘭日対訳辞典『ドゥーフ・ハルマ』(文化13年〔1816〕刊)に附されたH.ドゥーフの〈緒言・凡例〉の長崎通詞邦訳を、諸淵が書写した手控えが発見されている。(杉本つとむ「ばってんことば」と三瀬諸淵」(同『江戸洋学事情』所収、八坂

書房、1990年、28-29頁。『和蘭字彙』月報1、昭和49年、初出。)

大洲市立図書館編『郷土諸家文庫—三瀬諸淵先生文献目録』、大洲市立図書館、1985年、が編纂されている。しかし依然として、諸淵の「全遺品・文献を組織的に整理した」必携の基本文献は、松山高等商業学校商事調査會編『三瀬諸淵先生遺品文献目録』、松山高等商業学校商事調査會、昭和12年、である。目録を作成した住谷悦治の回想によれば、「ことに大洲町には当時八十二になる三瀬彦之進という三瀬家の当主が現存し、三瀬諸淵の顕揚のために生涯を過ごして居り、同町では『諸淵気狂い』などと呼ぶ者もあるほどの諸淵讃仰者で、諸淵に関するおびただしい遺品・文献の中にうづまり諸淵に興味をもつ人や研究者への手紙書きに時日を費し精進している奇篤な老翁であった。」(住谷「井蛙脱皮のエスペラント—転換期の学者「三瀬周三」の生涯と功業—日本史発掘32」、同論文、117頁。)

一方、プロレタリア作家の藤森成吉は「今まで出てゐるどの書物よりも正確詳細な傳記的半面を持つ」と自負して、「大洲町に住む遺族三瀬彦之進翁〔諸淵の甥—引用者〕が、その所蔵の山なす資料や文献を提供してくれたおかげである。また、同町の郷土史家近藤 佶^{つよし}氏が、周三周囲の人物や事實について教へてくれたおかげ」で、高野長英と三瀬周三を主人公とする歴史「教養小説(ビルヅングス・ロマン)」『若き洋學者たち』を書きえたと、回顧している。(同書、1-2頁。また、藤森「シイボルトと三瀬周三」(明治文化記念會編『明治文化研究・第5集』所収、日本古書通信社、昭和45年、14頁。)無論、藤森は渉獵した史料を三瀬本家に返却したであろうから、神奈川文学振興會編『藤森成吉文庫目録』、神奈川文学振興會、1990年、には、諸淵に関する資料としては、長井石峰『蘭學大家三瀬諸淵先生』、及び松山高等商業学校商事調査會編『三瀬諸淵先生遺品文献目録』の二冊の所蔵が記載されるのみである。藤森は、住谷悦治作成の諸淵の著訳書目録を参照したはずである。また藤森は、長井音次郎『愛媛縣先哲偉人叢書第二卷二宮敬作 三瀬諸淵』、松山堂書店、昭和9年、を参照した旨述べているが、同書は藤森蔵書目録には載っていない。しかし、同年刊行の住谷悦治『三瀬諸淵傳』、愛媛先哲叢書第5卷、大政翼賛會愛媛縣支部、昭和17年、は参看しえなかったと思われる。したがって、藤森の聞き書きや見分したと思しき大量の資料の仔細は判然としない。ただ、昭和12年から17年頃の間は、諸淵の数多の遺品も手稿もいまだ相当数見分できたことがわかる。

しかし住谷は、翌昭和18年に再録された同文献目録の末尾に「先生の著譯・原稿等は三箇の大長持にギツシりあつたさうであるが、現在散逸して所在不明のこと」と附記している。(住谷「三瀬諸淵の研究」、同論文、492頁。)

住谷は、整理された全遺品と文献は「その後、[旧制]大洲中学校(現高等学校?)

図書室」に移管されたと記している。しかし、昭和17年頃の松山での、戦禍による散佚は考えにくい。筆者がその伝存を問い合わせたところ、松山大学図書館、大洲市立博物館・図書館、(長崎)シーボルト記念館、(岡山)津山洋学資料館のいずれにも、ソクラテス論二手稿は保管されていないとのことであった。ネット検索「第1章 大洲市の歴史的背景」によれば、「資料は諸淵の甥である三瀬彦之進が所蔵していたものを、地元大洲で組織された三瀬諸淵顕彰会から引き継ぎ、昭和46年(1971)に大洲市に寄贈されたものである。三瀬諸淵の資料とは、シーボルトから贈られたとする洋丈、茶合などのシーボルト関係の遺品、写真のほか、三瀬諸淵の妻高子の母親でシーボルトの娘である楠本イネに関する資料も残され・・・(諸淵の)遺品、書簡、和歌、写真、ガラス乾板、書籍など、約500点にもおよぶ」という。しかし、ソクラテス論二手稿は遺されていない。

穂積重行『明治一法学者の出発—穂積陳重をめぐって』、岩波書店、1988年、7頁、は、諸淵による「ソクラテス、カントの紹介」に言及した稀な文献の一つである。著者に直接伺うと、やはり諸淵の手稿「哲学」—老荘の哲学・ソクラテスの哲学・カントの哲学—is 見分されていないとのこと。『三瀬諸淵先生遺品文献目録』中の住谷補註に依拠されたという。

なお、本文著訳書一覧中(二三)「社会黨撲滅ニ對スル獨乙法」は、住谷の指摘どおり、他書混入の可能性が高い。正式には「社会民主主義の公益に害ある行動に對する排除法」(Ausnahmegesetz gegen die gemeingefährlichen Bestrebungen der Sozialdemokratie)という。同法は、1878年[明治11年]、ビスマルクが突如発布し、4年の時限立法を2度更新して、1890年[明治23年]まで施行された。諸淵著とされる本独文手記は、明治4、5年[1871-72]頃の執筆と推定され、諸淵自身は明治10年[1877]他界する。太政官用箋に認められた手記とはいえ、真筆認定できない疑義が残るというのである。ただ、後述するように、諸淵は「社会主義」に一定の知識を持っていた。

- (10) 住谷『蘭醫 三瀬諸淵傳』、同書、21頁。藤森「シイボルトと三瀬周三」、同論文、9頁。永井荷風しながら、のちに住谷悦治もまた秘かに鷗外の学識に「無限の愛着」を抱く一人となる。昭和7年[1932]1月24日の日記。「森鷗外のVita sexualisを読んで深く感ずる。氏の如き深い学識の人に無限の愛着を覚える。自分は氏のこうした方向の生活記録をみて、やはりここでも氏が豊満な経験を有していることを知る。自分自身の才能に、かがやかしい希望をかけてゐない自分も、小さい乍ら、顧みて生活の広さと深さを考えてみる。沈思の日である。」(本庄豊「一九三〇～三三年の住谷悦治日記—ある知識人の精神の断面」、社会文学37号、2013年、79頁。)

- (11) 大津「三瀬諸淵—蘭医シーボルトの高弟獄中より獄制改善を献言」、前掲論文、

29頁。報告「第二十四回経済研究会—明治文化と三瀬諸淵」（発表者、住谷悦治・文）経済学論叢？号〔号数を確認できない〕、昭和28年、149頁。詳細は、住谷『蘭醫 三瀬諸淵傳』、同書、39頁。藤森『若き洋學者たち』、前掲書、1頁。今村明生『鎖国への道すじ』、文芸社、2012年、8頁。

なお、奇しくも享年39を同じくする諸淵と馬場辰猪は苦学の姿勢も酷似していた。「辰猪は著述と學問の研究に一身を委ねて、幼少より勉強の習ひ遂に性を爲して深夜鶏鳴を聞くも尚ほ睡る能はざる如き惡癖を醸成するに至れり、されば青燈の下に今古東西の書を繕きて學殖彌々豊富を加へ、識見益卓抜と爲り、眼中早く既に先輩なく所謂「三十登壇衆所尊」となり、當時の政論場裡君が爲に重きを致せりと云ふ。」（安永、前掲書、115頁。）一方、諸淵は大洲藩邸幽閉中も、佃島入獄中も蘭書翻訳の精励を怠らなかつた。「當時〔エルメレンス翻訳の大阪時代—引用者〕における周三の勉學振りは物凄いほどで、〔妻〕高子刀自の談によれば、屢々机に向つたまま夜を明かし、床を敷かずして机に倚りかかつて眠り、醒めれば讀書と執筆に餘念がなかつたといふ。」（住谷『蘭醫 三瀬諸淵傳』、同書、48頁。）おそらく「神童」と呼ばれた幼年期、青年時代のままの刻苦勉勵だったであろう。

學者職分論争の文献については、福沢諭吉「學者ノ職分ヲ論ス」、加藤弘之「福澤先生ノ論ニ答フ」、森有礼「學者職分論ノ評」、津田真道「學者職分論ノ評」、西周「非學者職分論」等。（松本三之介・山室信一校注『學問と知識人』所収、近代日本思想大系10、前掲書、参照。）

- (12) 杉本つとむ、前掲論文、39頁。杉本は三瀬本家（現・中町一丁目）を訪ね、諸淵の大禅寺に墓参している。また僅かな遺品の他、未公表の諸淵自筆の一片も見分している。ネット検索「諸淵」→「間口は広いが、奥行き無し」（大洲市指定史跡「三瀬諸淵生家」）たこ焼きやさんになっていた。二階の一角が当時のまま残されている。少年諸淵の使っていた部屋とのこと。）同「笑隆の庭」（立派な墓。諸淵は身分が低かったので、城のお堀の周りを歩いて八幡神社下にあった「古学堂」に通っていた。）同「旅蛙のメモリー」、参照。
- (13) 住谷「井蛙脱皮のエスペラント」、前掲論文、124-25頁。同「三瀬諸淵の研究」、前掲論文、490-91頁。なお、住谷は、当初、前篇文献目録中、英語読み表記の「プラトー」を、戦後、ドイツ語読み表記の「プラトン」に変えている。住谷が、先に借り出した在大連の「豊田博士」の借用書メモにあった「プラトー」の表記を踏襲したものか。あるいは、戦前執筆の住谷論文「プラトーの經濟思想」（同志社論叢9、大正11年。）から推して、住谷に「プラトー」表記の習慣があったせいか。諸淵の手稿前篇が「獨文」で綴られている以上、「プラトン」あるいは「プラトーン」と表記すべきところ、僅かな相違がある。つまり、確かに住谷は本前篇手稿を見分していないのである。

この住谷補註以外に、ソクラテス前篇に言及した文献は、本稿註(9)で紹介した穂積重行『明治一法学者の出発—穂積陳重をめぐって』がある。しかし、住谷補註に依拠。D・W・ラーネッドについては、次の文献がある。住谷悦治「ラーネッド博士の「経済略説」及び「貨幣論」、経済学論叢7巻1号、1956年。同「第二章 ラーネッド博士の経済學説」(同『日本經濟學史の一駒』所収、大畑書店、昭和9年。)同『ラーネッド博士伝一人と思想』、未来社、1973年。

- (14) 福田徳三が遺したものか、旧歴史学派の記念碑的著作と言われるロッシヤーの原書は、一橋大学附属図書館に所蔵がある。筆者未見。同図書館の「福田徳三関係文書」中に、「*Theoretische Nationalökonomie* (1929-30) IX」があるよし。昭和13年刊の岩波文庫邦訳書「凡例(六)」によると、この時点で既に原書は「稀観的なものとなつてゐる」。(ロッシヤー著／山田雄三譯『歴史的方法に據る國家經濟學講義要綱』、岩波文庫、岩波書店、昭和13年、4頁。)本訳は、福田徳三指導の下、昭和4年の訳了の原稿が刊行されたものという。なお、ロッシヤーの原書は、諸淵蔵書目録中「洋書」の部には載っていない。(住谷「三瀬諸淵の研究」、前掲論文、477-78頁。)Roscher著の英訳本には、John J.Lalor (Eng.tr.s.by), *Principles of Political Economy*, from 13th ed., 1877. がある。ライプツィヒでロッシヤーに就いて学び、イタリアで旧歴史学派経済学の紹介者となったL.Cossa(コッサ)の主著 *Guida allo Studio dell' Economica Politica* (1876, 2nd revised ed., 1878)の英訳本 *Guide to the Study of Political Economy* (London, 1880)は、明治20年前後にわが国でも大学、専門学校などの教材として普及したという。明治5年[1872]刊のウェーランド／瓊江何譯『世渡りの杖、一名經濟便蒙』の原題もPolitical Economyである。「経済学」の語義には変遷があり、それを定義することは難しい。ここで言うPolitical Economyとは江戸時代の邦語「經世済民」と同義としてよいであろう。明治以降は、「經濟」の二語に約められている。一方、K.Diehl(ディーエル)の同名の原書 *Theoretische Nationalökonomie*, 3 bde., (1916-27)には、戦前に邦訳がある。杉山勝知・生駒佳年譯註『理論經濟學』、對譯脚註獨逸論文叢書・第2、南山堂書房、昭和5年、及び本邦刊原文Kanta Suzuki, *Theoretische Nationalökonomie*, Nanzando, 2 Aufl., 1932がある。筆者未見。同著者には、*Einführung in die Nationalökonomie*, Jana, G.Fisher, 2 Aufl., 1916の著作もある。

『歴史的方法に據る國家經濟學講義要綱』ではないが、ロッシヤー著の本邦初訳書は、ロッシヤー著／平田東助・平塚定次郎・武内常太郎・湯川寛吉譯『商工經濟論』、明治29年[1896]刊。)である。本稿後論の保護貿易論者の大立者・大島貞益は、F・リストや、ロッシヤーの学説に従ったのである。

- (15) 「ため息の得るような論文」(1903年刊)と言われる、M.ウェーバー／松井秀親訳『ロッシヤーとクニース』、未来社、1988年、24-25頁。ロッシヤー著／山田雄

- 三譯『歴史的方法に據る國家經濟學講義要綱』、同譯書、319頁、歴史学派全体については、住谷悦治『經濟學說の歴史性・階級性』、弘文堂書房、昭和5年。同『リストの國民主義經濟學』、河出書房、昭和14年、参照。なお、本邦におけるドイツ歴史学派とヴェーバー研究の関係については、内田芳明「II 日本社会諸科学におけるマックス・ヴェーバー—日本におけるヴェーバー受容（1905-1978）」（同『ヴェーバー受容と文化のトポロジー』所収、リプロポート、1990年。）及び、ヴォルフガング・シェヴェントカー／野口雅弘・鈴木直・細井保・木村裕之訳『マックス・ヴェーバーの日本—受容史1905-1995』、みすず書房、2013年、参照。
- (16) 石川脩男「幕末における国家観と倫理」（日本倫理学会編『近代日本における国家と倫理』所収、日本倫理学会、昭和62年、14頁。）
- (17) 原蘭文からの訳文は、『西周全集4』、宗高書房、昭和56年、701頁より引用。
- (18) 關新吾「序」（中村護編輯『小學口授經濟談』所収、柳原喜平衡、明治12年〔1879〕。）
- (19) 住谷悦治「明治初期移入經濟思想の一斷面」、同志社大學經濟學論叢4巻2号、1952年、54頁、57-58頁。同『日本經濟学史』、ミネルヴァ書房、昭和33年、21-32頁。
- (20) 飯田鼎「明治10年代の日本における經濟学研究の一斷面—住谷悦治著「ラーネット博士伝一人と思想」を読んで」、三田学会雑誌69巻2・3号、1976年、11頁。
- (21) 飯田鼎「ドイツ新歴史学派の導入と日本資本主義：明治期における労働問題認識と新歴史学派經濟学」、三田学会雑誌66巻9号、1973年、2頁。
- (22) 住谷「明治初期移入經濟思想の一斷面」、前掲論文、70頁。住谷『日本經濟史』、前掲書、20頁。新歴史学派移入当時の経緯は、加田哲二『明治初期社會經濟思想史』、岩波書店、昭和12年、参照。
- (23) 住谷悦治『日本經濟史』、同書、92-93頁。大山敷太郎は、若山の保護貿易論の素地を、若山の「兵庫奉行大坂町奉行手附」という外国貿易事務方の経験に求めている。大山敷太郎「若山儀一氏の生涯とその業績」（同編『若山儀一全集（上）』所収、東洋經濟新報社、昭和15年、2-3頁。大山は、ロッシヤーの影響に言及していない。
- (24) 阪谷芳郎、天野爲之の邦訳底本は、L.Cossa, *Guide to the study of political economy*, Eng. translated from the second Italian edition with a preface by W.S.Jevons, London, 1880. 増訂三版が、Introduzione allo studio dell' economica politica, 1892. 福田徳三は辛辣に評している。「伊太利書に甚だ便利な書あり・・・コッサは學者として深き研究者にあらず、其著す所凡て皆コンパイレーション（編集）と稱す可く、獨創の意見に成るもの甚だ乏し、此書に至つては殊に然り。されば其説く所悉く淺薄、皮を相して肉に至らず、初學者には便なるには相違なけれども、初より多讀を期せざるものは、須らく第一流の書のみを讀むを却て勝れりと

する点を云へば、必ずしも推薦す可き書と云ふを得ず。」(同『経済學講義(上中下)』、同文館、明治40-41年。引用文は、同『福田徳三經濟學全集1』、大倉書店、大正14年、137-38頁。)

- (25) ヴォルフガング・シェヴェントカー／野口雅弘・鈴木直・細井保・木村裕之訳『マックス・ヴェーバーの日本—受容史1905-1995』、前掲訳書、55頁。本邦におけるヴェーバー紹介の嚆矢は、河田嗣郎『資本主義的精神』、法律學・經濟學双書6、京都法學會、明治43年、とされている。
- (26) 住谷『日本經濟史』、前掲書、24頁、36頁。
- (27) 日獨文化協會編『シーボルト關係書翰集—シーボルトよりシーボルトへ』、岩波書店、昭和16年、121頁。
- (28) 長井『蘭學大家 三瀬諸淵先生』、前掲書、45頁、205頁。伊藤貫一「三瀬周三の事」傳記3巻12號、昭和11年、62頁。
- (29) ロッシーア著／山田雄三譯『歴史的方法に據る國家經濟學講義要綱』、前掲訳書、292-93頁。ロッシーアの論文“Ueber das Verhältniss der Nationalökonomik zum klassischen Altertume” (in, *Ansichten der Volkswirtschaft*, Leipzig u.Heidelberg, 1861) の初出は、Berichten der historisch-philologischen Klasse der Königl. Sächsischen Gesellschaft der Wissenschaft, 1849。

なお、対話篇『エリュクシアス』が16世紀のステファヌス版プラトン全集で偽書と認定されたのは、既に古代文献ディオゲネス・ラエルティオス『ギリシア哲学者列伝』(Diog.Laert.,III.62)で偽対話篇に分類されていたことによる。同『列伝』によれば、それ以前に、偽書を排除したトラシュロス編纂の四部作形式のプラトン全集や、文献学者アリストファネス編纂の三部形式の全集が刊行されていたことがわかる。ただ内容上、対話篇『エリュクシアス』は、プラトン没後の前3世紀初頭ヘレニズム期のアカデメイア学園の別人の著作と推測され、ストア派思想の浸透が認められている。内山勝利「『ステファヌス版』以前以後 —『プラトン著作集』伝承史から—」静脩40巻2号、2003年。
- (30) 稀観雑誌のため、中川恒次郎同譯は筆者未見。以下の坂田太郎氏も未見の由。中川邦譯論文にはソクラテス論が展開されている可能性が極めて高いと思われる。したがって、長期連載論文「伴痴齋(直之助)「古代經濟沿革史」東京經濟雜誌253, 254, 255, 256號、明治18年。」を暫定的に初出とせざるを得ない。坂田太郎「明治草創期の「経済学史」—乗竹孝太郎・伴直之助を中心として」、明治大学政経論叢41巻6号、1973年。
- (31) 杉原四郎「資料紹介 コッサの業績とその日本への導入について—明治經濟学史の一側面」、関西大学經濟論集19巻3号、昭和44年、109頁。
- (32) 沖中恒幸『經濟學史』、精興社書房、昭和17年、1頁。クセノフォンからの引用

は、クセノポーン／田中秀央・山岡亮一譯『家政論』、生活社、昭和19年、41頁。

なお、「重商主義」も「重農主義」も、明治草創期の訳語は一定しない。前者には「商業規律論」、「貴金主義」等、後者には「物理學派」、「理物學派」、「自然理治學派」、「天法學派」、「天力派、天理學派」、原名通り「フイジヨクラット」、「フキジヨクラット」等がある。